

VII 総括

前章までに今帰仁城跡周辺遺跡の第2・3・5・6・7・8次発掘調査の成果とこれに関する研究を紹介してきた。最後に若干のまとめをして結びとしたい。

まず最初に、周辺遺跡の使用年代について考えてみたい。検出された陶磁器をみると屋敷地1・3・4のいずれも主体となる陶磁器の年代は14世紀から16世紀のもので、これは今帰仁城に山北王が居住しその後監守がやってきた時期に比定される。14世紀を遡る資料も皆無ではなく玉縁白磁碗や同安窯系の青磁皿、あるいはカムイヤキや在地土器等の遺物も散見される。このような古手の遺物が散見される様子は当該地域への開発、定住行為がこの段階まで遡る可能性を示していると考えられる。しかし、今帰仁城跡主郭の第Ⅶ層のように層を成して遺跡を形成し、明確な遺構を確認できるような状況にはなく、その出土量も少ない。他方17世紀以降の遺物は極めて少なく、道跡で採集された肥前磁器や屋敷地1で報告した寛永通寶に当該期の人の関わりを想定することができるが、これは恒常的な生活を証明するとは考えにくい。なお、明治期以降の遺物については定量得られるので、この地域における1609年の実質的な廃村以降再び人の関わりが恒常化するのとは明治期と考えられる。以上のように、回収された遺物からは、ほぼ今帰仁城の存続期として現在想定されている13世紀後半から17世紀初頭に限定されるもので、僅かながら得られた土器や陶磁器からこれを遡る時期のものも含まれることを指摘することができる。

遺構は屋敷地のそれぞれで柱穴と想定されるピットが多数検出されたことが特筆される。その数は、屋敷地1が85基（うち要検討6）、屋敷地3が522（うち要検討49）基、屋敷地4が299基である。屋敷地の開発は自然地形に制約されながら選択されたと考えられる。例えば、屋敷地3のSX1138、屋敷地4のSX420などの礫が集中する不明の落ち込みは、宅地開発以前に自然地形として地表面に洞穴が開いていたものを塞いだような遺構と考えられる。また、遺構検出面と地山までの移行層として確認された堆積層は、今帰仁城跡の主郭や志慶真門郭で見られるような整地作業ほど明確な造成層では無いが、整地作業に準ずるような堆積層と考えられる。各屋敷地で復元することのできた建物跡は、検出されたピットの数に比して極めて少ない。これに関しては調査担当者の非力を認めるところである。しかし調査中はピットの検出と記録類の作成、遺物の回収に追われるとともに、短期の調査期間において成果を出さなければならない状況であった。更に、期間中天候不良に再三悩まされ難渋したことは、遺構の判断を鈍らせる結果となった、反省点である。それでも屋敷地3で（要検討の建物跡1棟を含む）5棟の建物跡を復元、屋敷地4では（要検討の建物跡1棟を含む）2棟の建物跡を復元することができた。特に4本柱の建物跡は高倉（高床式倉庫）と想定され、その規格も短軸方向が150～180cm、長軸方向が170～225cmと長方形で比率は短軸1に対して長軸が1.13～1.33になるなど一定の規格を想定することができた。この他、土坑も多数検出されている。しかし残念ながらそれぞれの機能の検討は行えてない。土坑の機能や用途については今後の課題である。今回検出された遺構の中で、特筆されるものは、竪穴建物とした屋敷地3のSB01があげられる。このような形状の竪穴建物の検出は、管見の限り沖縄では初例であり、規模や柱穴の配置こそ異なるものの日本本州の中世遺跡でしばしば検出例（例えば、堂込2003）が知られているものと近似する。

出土遺物（人工遺物）の約9割は中国陶磁器で、14世紀後半～16世紀の遺物が多いことは先に調査された志慶真門郭や主郭ともほぼ同様の出土傾向であると考えられる。注目された中国陶磁器として元（様）青花などの優品が多出している。また古式の資料として小破片だが白磁玉縁口縁碗の口縁部が検出されたことは、今後の調査研究によって今帰仁城跡周辺遺跡の年

代的な位置付けを遡る良好な例に期待したい。白磁で注目されるのはいわゆる枢府手として呼称される「印刻文碗」が出土した点である。当該資料は主郭では確認されず志慶真門郭の調査で1例得られており、今帰仁村内の発掘調査でも希有な例である。また、このような志慶真門郭と同種の遺物あるいは主郭と同種の遺物が得られていることも成果の一つである。例えば青花大皿(82-4)と類品が志慶真門郭(『今帰仁城跡Ⅰ』31-8)でも得られ、やはり青花大皿(28-12)が主郭で出土する(『今帰仁城跡Ⅱ』68-4)など各郭間、各屋敷間の関係等を考える上で極めて興味深い。例に示したように多くの遺物が今帰仁城跡で出土しているが、城内では一定量出土するにもかかわらず、当該地域ではあまり出土しなかった遺物も数例ある。その一つとして黒釉の碗、いわゆる天目茶碗をあげておきたい。主郭や志慶真門郭の報告では数量こそ示していないもの、相当量が出土している。しかし今回の調査では各屋敷地から2個体程度の出土となっている。このような各陶磁器における城内外での出土の有無やその構成比は、各郭、各屋敷地毎に異なるものと考えられ今後の調査でも引き続き検討すべき課題である。他方、各屋敷地で同種同形の資料が得られた例も紹介したい。それは屋敷地3の青磁碗(49-11)と屋敷地4の青磁碗(76-10)である。このような資料の相似や比較検討によって各屋敷地の関係性に言及できるのではないかと考える。いずれにせよ興味深い事例として記しておきたい。その他、類例の希少な無釉陶器や五彩碗、瑠璃釉碗・玉壺春瓶、翡翠釉皿、三彩鶴・鴨形水注などは本周辺遺跡を特徴付ける出土遺物である。高麗青磁は屋敷地3で出土した小片があるが器形等については判然としない。今回の調査では前述のとおり多くの遺物が城内の調査で出土例が知られている。その一方で、これまで城内でも出土例が知られず、今回の周辺遺跡の調査で初めて出土したものに半練(身)があげられる。これはタイ産の土器壺で、主郭の調査では土器蓋が87個体と多出するのに対して、身の欠如が指摘されてきた。これについては身が褐釉陶器の壺であることが指摘されており、酒などの運搬に用いられたと想定されている(金武2000)。土器の身そのものも城内では未見で、城外の集落遺跡で出土したことになんらかの意味があるのか、興味深い事例である。この他、ベトナム陶磁が小片で数個得られている。白磁の小碗(59-10)はこれもやはり城内では未見の器形である。本土産の陶磁器類はほとんど無く、屋敷地4で備前の播鉢が2個体出土しており、その年代的な位置づけも、Ⅳ期・Ⅴ期(間壁1977)と二時期のものが搬入されていたことが窺える。

陶磁器は今帰仁城跡の往時の貿易量を彷彿とさせ、その交易範囲を示す事例である。また、組成の異同は城内外の関係性を検討する上で重要な情報となるものと考えられる。例えば中国陶磁器の器種としてほぼすべての器種がそれぞれの屋敷地で得られるものの、やはりその主体は碗・皿・盤で香炉、瓶、壺といった大型品・優品・趣向品の出土は城内に比して少ない。中でも天目茶碗や本土産瓦質土器などは、周辺遺跡ではほとんど出土しない。一方では、これまで城内では出土例の無かったタイ産の土器(身)が出土している点も興味深い事実であるが、今後城内の調査が進むことによって出土しないと限らない。いずれも資料増加を待って言及したい。

陶磁器以外の遺物では玉類、銭貨、金属製品、石製品が少量各屋敷地から出土している。玉は屋敷地1では勾玉1点と小玉2点出土し、屋敷地3ではガラス製の小玉が22点、屋敷地4では小玉が2点出土している。銭貨はこれまでの調査で、主郭では約1,300枚出土するのに対して、志慶真門郭では72枚、今回報告分の屋敷地1・3・4では合わせて14枚の出土である。その量的な差から経済的な関係の差異を想起させる。銭が沖縄島内において流通したのかを考える上で城内外の出土の相違、各屋敷における銭出土の有無は貨幣経済が少なくともグスク周辺地域までは影響、成立していたのではないかと想定させる。その他、出土した鉄製品の多くは消耗品の釘で武具の鎌、日用品の刀子や鋏などが少量であるが確認されている。ほかにも、製品と

しての用途を推定するのは困難ではあるが、板状の鉄片が得られている、あるいは鉄鍋などの破片資料ではないかと考えられる。石器は、砥石が多く屋敷地3より硯が出土している。興味深い資料として錘があげられる。表品は石製で細長いラグビーボールのような形状、長手方向と中央の膨らみ部分に溝が彫られており紐を溝に沿って縛り固定させて使ったのであろう。同様の資料は志慶真門郭でも多く出土している。錘はこの他にもタカラガイの殻頂部を割った表品がその可能性のある製品として報告紹介した。自然遺物である可能性も指摘されるが、これらの加工の簡便な貝製品などについても目を配る必要があるだろう。

最後に食料残渣として推定される炭化米、麦などの植物遺体をフローテーション法によって検出することができた。少量ながら各屋敷地よりそれぞれサンプリングし得られている。今後は同様の調査方法を多くの屋敷地、あるいは城内で繰り返すことで、各屋敷の食生活復元に役立てることができるのではないかと考える。調査の方法や精度に多少差はあるものの、志慶真門郭の調査では「5区V層は炭化米・麦層と呼べるぐらい集中的に検出され(中略)全体的に麦よりは米が多い」としている(『今帰仁城跡I』)。詳細の検討は今後の課題としたいが傾向として今回のフローテーションではアワやコムギが主でイネ(コメ)は少ない点は城内外の食生活の差を見るようで興味深い。脊椎動物骨として獣骨と魚骨に分け紹介すると、獣骨ではウシ、ウマなどの家畜類が多く得られている。城内ではイノシシ/ブタが多いのに比して特徴的な出土状況であるとされる。このほかウミガメ、ジュゴン、クジラなど海洋性の動物もいずれの屋敷地とも無く、やはり城内とは状況を異にするようである。魚類ではベラ科・ブダイ科の2科が多く出土しており両者で50%を占有する。魚骨の採集では今回試験的に屋敷地4の遺構内の採集土砂をフローテーション法によって水洗いし、HFの1mmメッシュにかかった小骨片を名島氏に依頼して魚類同定を行った。これによって小型のベラ科やモンガラカワハギ科、ニザダイ科などが確認されサンゴ礁に生息する小型魚類の捕獲食料化を実証することに結びついている。今回は一部地域で実施したフローテーション法による小骨片のサンプリングも今後各地域で資料数を増やすことによって細かい比較検討を行えるものと期待したい。貝類は黒住氏によれば、大型のシャコガイやヤコウガイが目立って出土した主郭に比べると圧倒的にその量が少なく、マガキガイ、チョウセンサザエ・オニコブシ・ハナマルユキの優占する外洋-サンゴ礁域の貝類で全体の90%以上が占められるとされる。この結果は投棄した場所の問題や貝殻の溶解の問題ということを考えても特異な状況を示しており、主郭での出土傾向とは異なるものであるとされる。周辺遺跡の居住者である集団が、少なくとも自給的にサンゴ礁域で貝類採集を行った結果であると指摘する。

以上、発掘調査で確認された遺構、遺物から今帰仁城跡周辺遺跡の機能や、そこに生活した集団について確認することができた成果を総括した。文献史学、民俗、人文地理などの成果によれば今回の主な調査地区となった今帰仁ムラ跡の屋敷地1~4は、現今泊集落の故地と考えられる。それを実証するように16世紀までの居住の存在を考古学的に証明できたことはこれまで記してきたとおりである。更に踏み込んで検討することとして「これらの各屋敷の家主とも言うべき成員は誰であったのか？」という事に興味はおよぶ。この点に関してその陶磁器様相などから、屋敷地の構成員は志慶真門郭の住人とほぼ同じもしくはそれに準ずるクラスの人々であったのではないかと考えている。志慶真門郭の成員=城主に仕えた家臣団的集団と考えられているので、これに準ずる人々であったのだろう。黒住氏によれば、自給的にサンゴ礁域で貝類採集を行った集団を貝類遺体より導き出している。考古学的な研究からは各屋敷の家主について集団あるいは社会の構成員として検討することにとどまるものの、今後詳細な検討をすることで屋敷地の家主の生業に迫れるのではないかと考える。もしかすると現今泊集落との関係を明確にし、引っ越し先を推定することができるのではないかと期待する。これに関し

て、例えば屋敷地1の北端崖下にある自然洞穴が仲原門中の拜所である事実から屋敷地1と仲原門中との関係を検討することも可能であろう。また、屋敷地4で出土した巴文入りの銅製品が、ある特定の門中（具体的には具志頭御殿紋章が近似すると考える〔図版37-3〕）の家紋であることなどから、その屋敷地4と家紋を持った門中との関係を指摘し、屋敷地4の居住者を特定することに役立つのではないかと考えることも可能である。

いずれにせよ諸種の課題について検討する上でも、今後も今帰仁城跡周辺地域の発掘調査を進めることが重要であることは言うまでもないが、このような貴重な成果を提供した遺跡が開発に伴い発掘され、駐車場等の施設下になったことはその成果の重要性を鑑みると惜しい気もしないでもない。この点では全面保存することができず、埋め戻し、一部開発行為が及んだことは憂慮すべき事実であることを調査担当者として肝に銘じておく必要がある。一方では開発に伴って発掘されたとはいえ、工事期間中も発掘調査の進行によって工事変更を繰り返し、開発側担当者には遺跡に配慮し多くの点で妥協点を探し苦労したことも印象的である。工事関係者の尽力によって結果として調査完了時には一部地域を除いて遺構検出面に砂を敷き均し、これを埋設したあとに構造物を建築することができたところも多い。

最後になったが今回の調査成果が今帰仁城跡の周辺整備として実施された工事に伴うものであったが、犠牲になった遺跡に差じないように今帰仁城跡が活用されることを願うと共に、今回の今帰仁城跡周辺整備事業から外すことができた今帰仁城跡周辺遺跡、特に今帰仁ムラ跡東区が早期に指定され、本調査の成果がこれらの指定と今後の保存活用の一助になることが期待される。グスクにおける周辺地域集落跡の大規模な発掘調査は、今帰仁に限らず沖縄でもこれが初めてではないだろうか。本調査の成果が、今後グスクと集落を研究する上で重要な成果として活用されることを期待したい。

〈引用参考文献〉

- 金武正紀・宮里末廣・ほか 1983年『今帰仁城跡発掘調査報告Ⅰ』今帰仁村文化財調査報告書第9集 今帰仁村教育委員会
- 金武正紀・宮里末廣・ほか 1991年『今帰仁城跡発掘調査報告Ⅱ』今帰仁村文化財調査報告書第14集 今帰仁村教育委員会
- 金武正紀 2000年「陶磁器が語るグスク時代の酒器」『琉球・東アジアの人と文化』高宮廣衛先生古希記念論集刊行会
- 堂込秀人 2003年「堅穴建物」『季刊考古学』第85号 雄山閣
- 間壁忠彦 1977年「備前」『世界陶磁全集』3 小学館
- 宮里朝光・監修 2001年『沖縄門中大事典』那覇出版社

写真図版



平成15年度 発掘調査作業員



1. 空から見た今帰仁城跡及び周辺遺跡



3. ハンタ道



2. サカンケーでの御願行事



4. 供のかねノ口火の神の祠



5. ハタイ原のガマ(仲原門中の拝所)



6. クバの(クボウヌ)御嶽



7. 安次嶺神アサギにおける御願行事



1. II区調査着手前



2. II区(道跡)実測作業



3. ハラクブ地区の伐採、清掃



4. V区発掘作業



5. V区日没後の作業



6. V区現場説明会



7. III区c発掘調査



8. IV区表土剥ぎ取り作業



1. Ⅲ区 a 実測作業



2. Ⅲ区 a 現場埋め戻し作業



3. Ⅲ区 b 台風18号における被害



4. Ⅲ区 b 発掘作業



5. Ⅱ区 a の試掘調査



6. 外郭道路敷下の調査



7. 採集土砂のフローテーション作業



8. ハラクブ地区の試掘調査



1. II区 b (L-15・16、K-15・16)完掘(北から南)



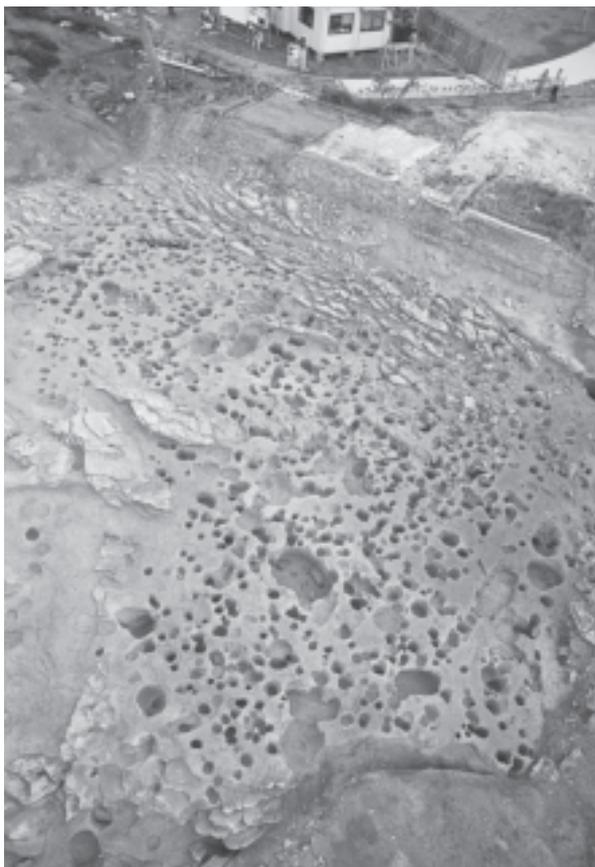
2. II区 a (L-18)完掘(西から東)



3. II区 b 北側発掘作業



4. II区 b (I-14西壁)セクション



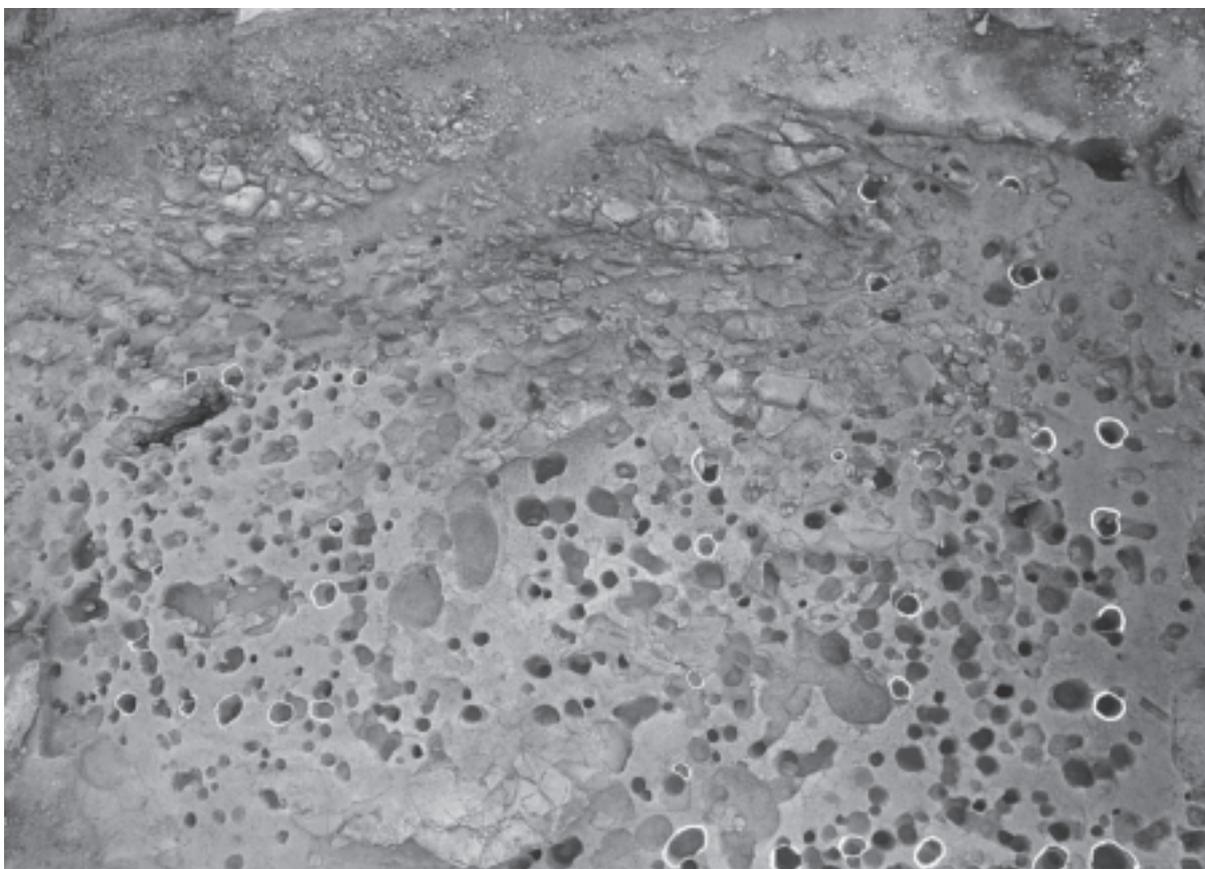
1. 屋敷地 2 (Ⅲ区 b) 完掘(南から北)



2. 褐釉陶器壺出土(Pit 2 より出土)



3. 白磁燈明皿出土(Pit 461 より出土)



4. 屋敷地 2 検出の建物跡



1. 屋敷地 3 (Ⅲ区 a) 完掘 (南から北)



2. 屋敷地 3 (Ⅲ区 a) 遺構検出 (北から南)



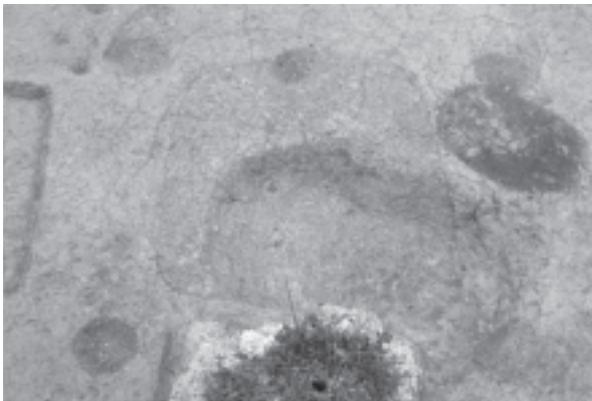
3. 屋敷地 3 (Ⅲ区 a) 遺構完掘 (北から南)



4. 屋敷地 3 (Ⅲ区 c) 完掘 (南から北)



1. 屋敷地3 検出の建物跡(右からSB01・SB02・SB03)(南から北)



2. SB01遺構検出(北から南)



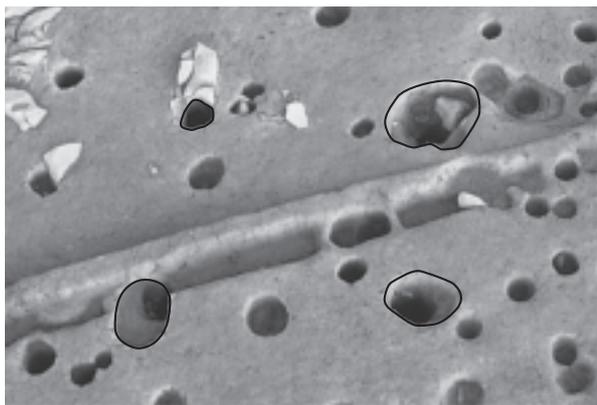
4. SB02遺構完掘(北から南)



3. SB01遺構完掘(北から南)



5. SB03遺構完掘(北から南)



1. SB04遺構完掘状況



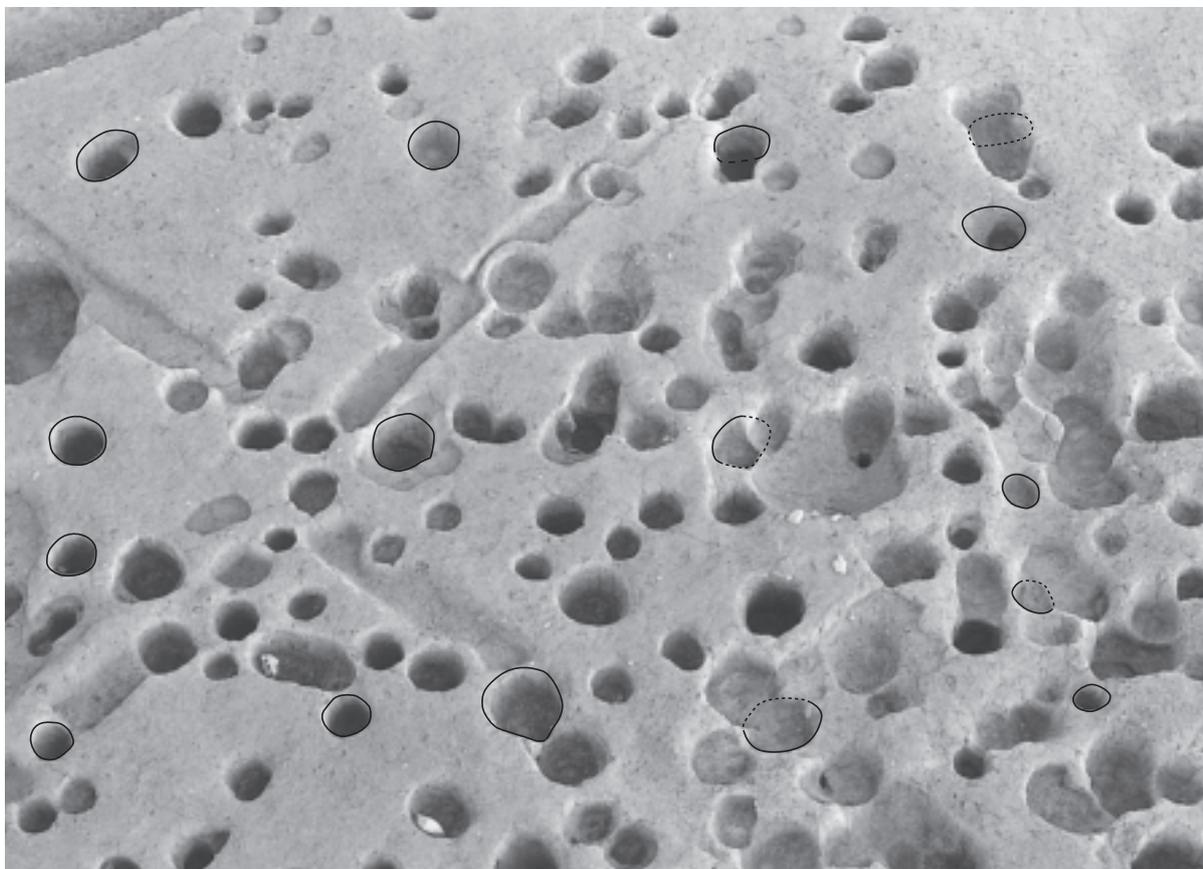
3. SK92遺構検出(半裁)状況



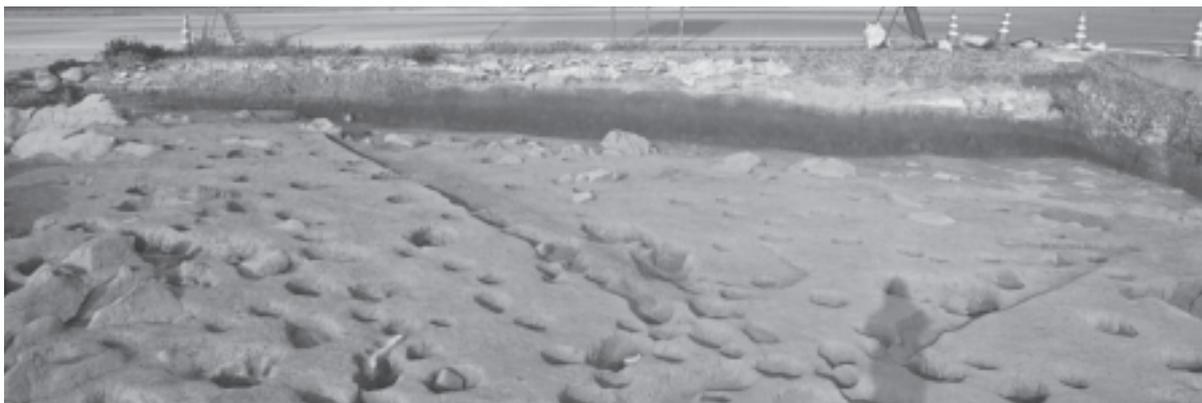
2. SX1138遺構検出状況



4. SK520遺構完掘状況



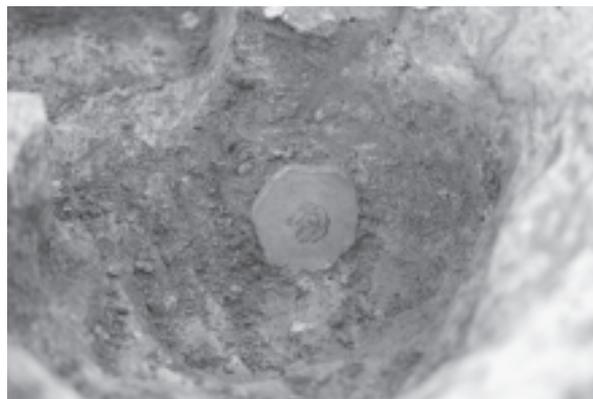
5. SB04遺構完掘状況



1. 屋敷地3土層セクション



2. 土器出土(Pit165より出土、dot104)



3. 青磁皿出土(Pit874より出土、dot152)



4. 金属製品出土(Pit562より出土、dot132)



5. 青磁皿出土(包含層より出土、dot1)



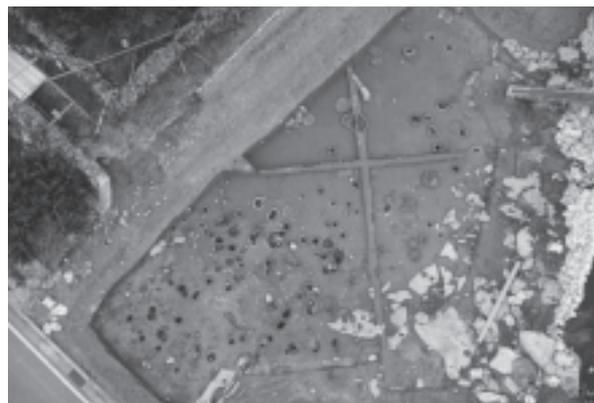
6. 青磁碗出土(包含層より出土、dot9)



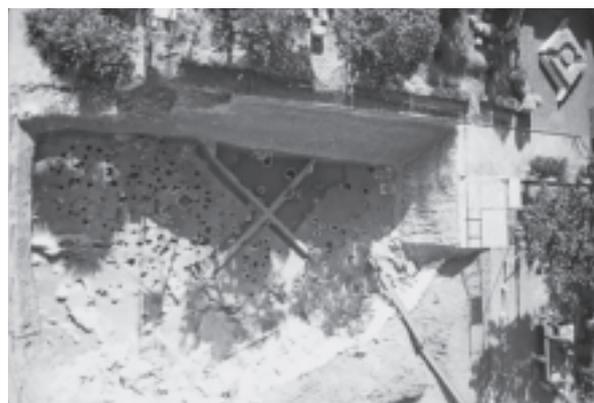
7. ガラス製小玉出土(Pit898より出土、dot150)



1. 屋敷地4(V区)完掘(南から北)



2. 屋敷地4(V区)遺構検出(12月26日)



3. 屋敷地4(V区)遺構検出(12月29日)



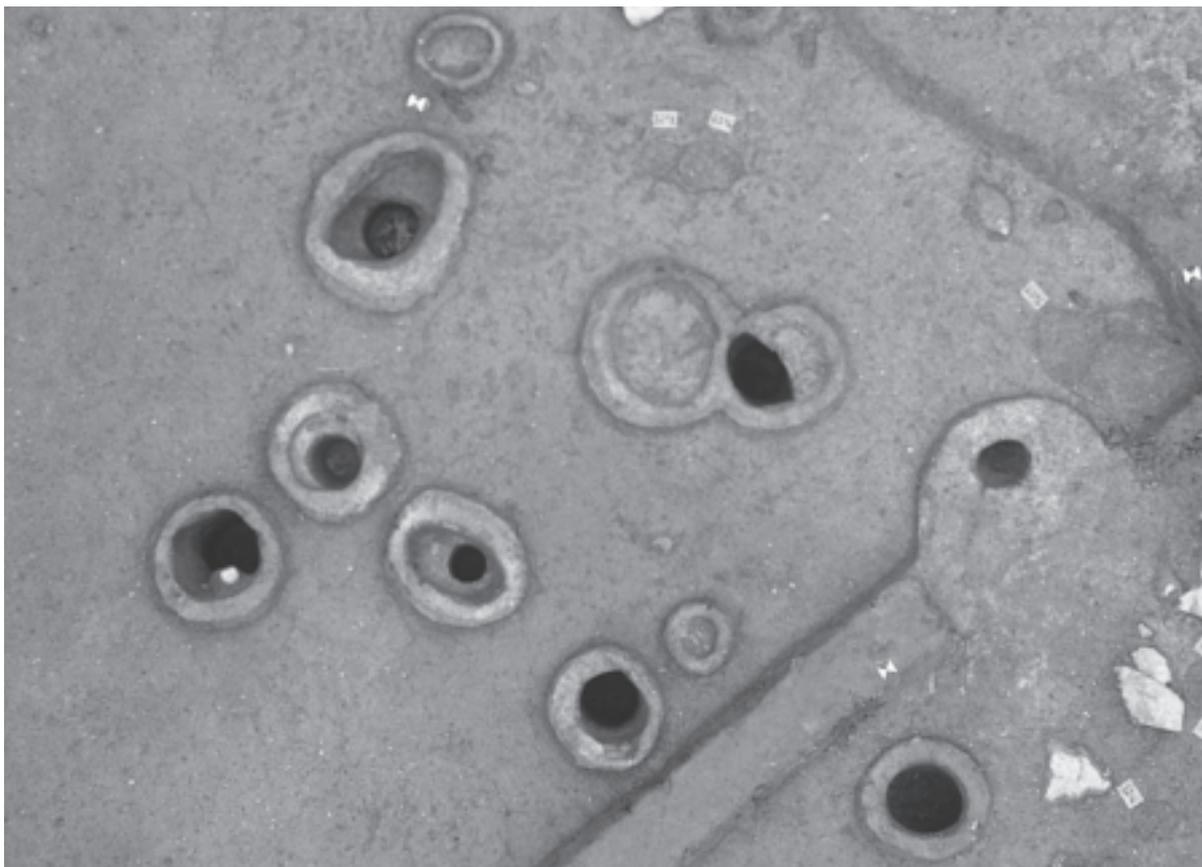
4. 屋敷地4(V区)着手前(北から南)



5. 屋敷地4(V区)発掘調査(北から南)



6. 屋敷地4(V区)土層セクション



1. SB01遺構検出状況(南から北)



2. SB02遺構検出状況(南から北)



1. SK102遺構検出



2. SK102覆土堆積状況



3. SK147覆土堆積状況



4. SK165覆土堆積状況



5. SX420遺構検出(西から東)



6. SX420遺構発掘作業(西から東)



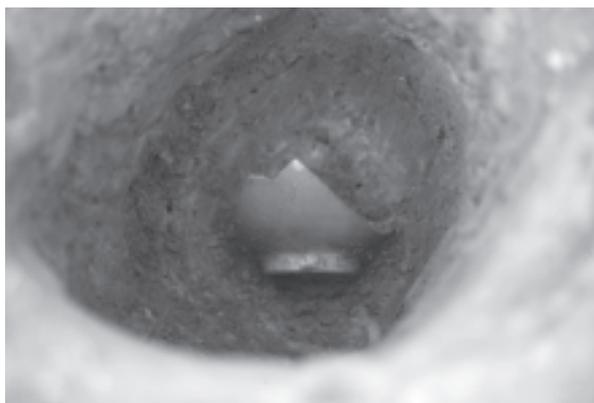
7. SX420遺構完掘(西から東)



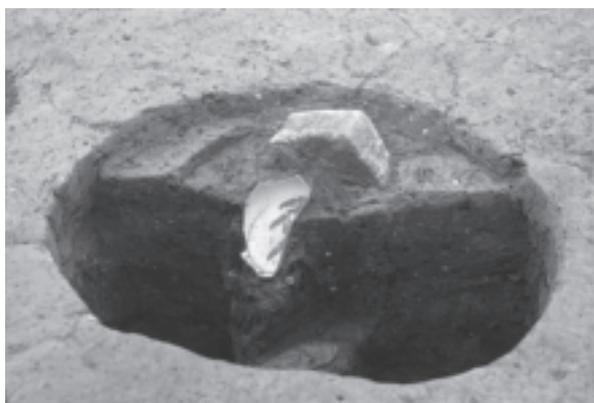
8. SX420遺構覆土堆積状況



1. タイ褐釉陶器壺出土(dot207)



2. 青磁碗出土(Pit401より出土、dot909)



3. 青花皿出土(Pit89より出土、dot89)



4. 青磁碗出土(包含層より出土、dot888)



5. 獣骨出土(SK102より出土、獣骨)



6. 金属製品出土(包含層より出土、dot362)



7. 土器底部出土(包含層より出土、dot904)



1. I区調査区完掘(南から北)



2. 道跡検出(南から北)



1. IV区(旧称Ⅲ区d)敷石遺構検出



2. IV区(旧称Ⅲ区d)調査区完掘(西から東)



3. IV区調査区完掘(南から北)



4. ハラクブ 石積み遺構No.4着手前



5. ハラクブ 石積み遺構No.4完掘



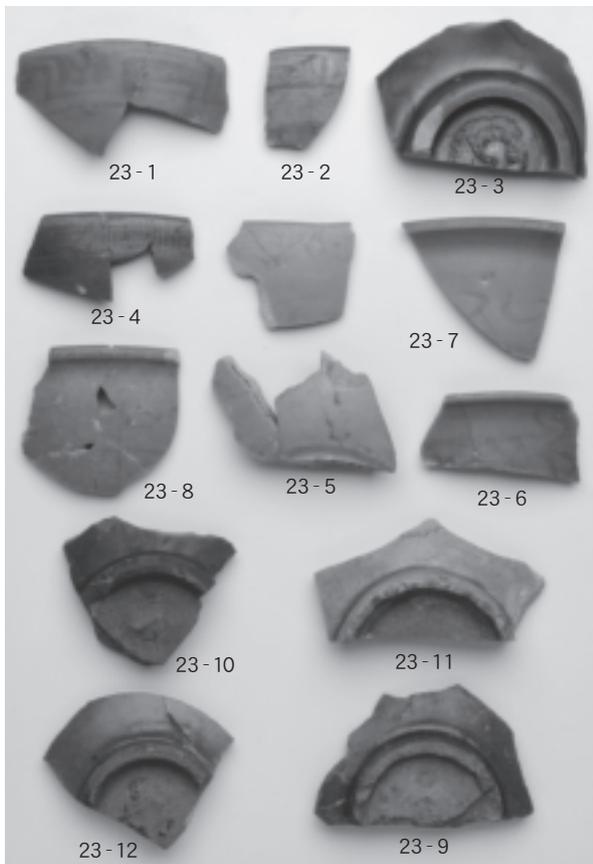
6. ハラクブ 石積み遺構No.3



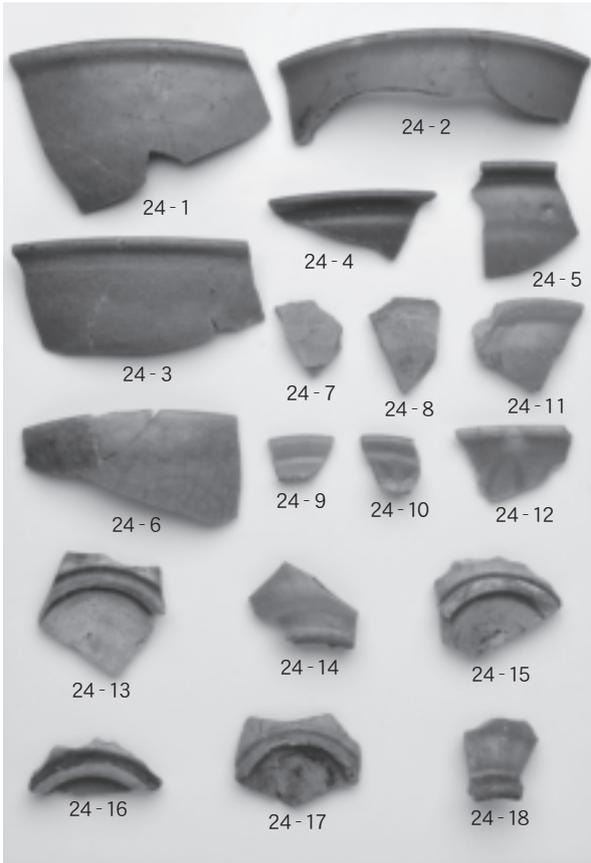
7. ハラクブ 外郭沿いの堀り切り状遺構



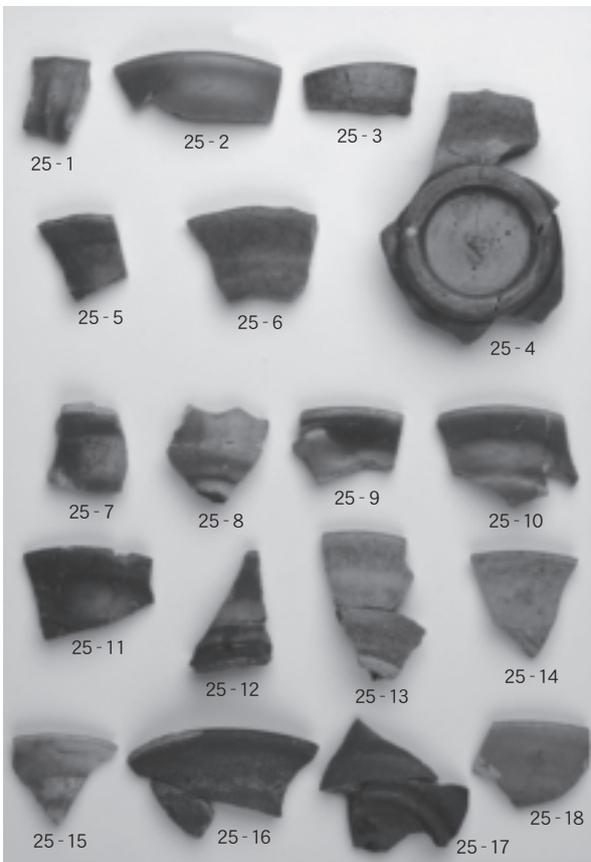
1. 出土遺物(1) 土器、カムイヤキ、青磁



2. 出土遺物(2) 青磁



1. 出土遺物(3) 青磁



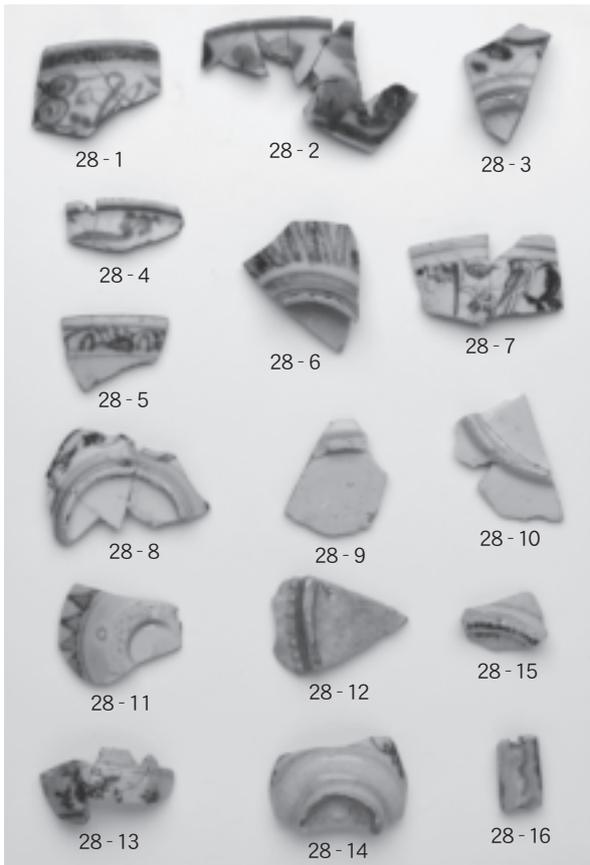
2. 出土遺物(4) 青磁



1. 出土遺物(5) 青磁



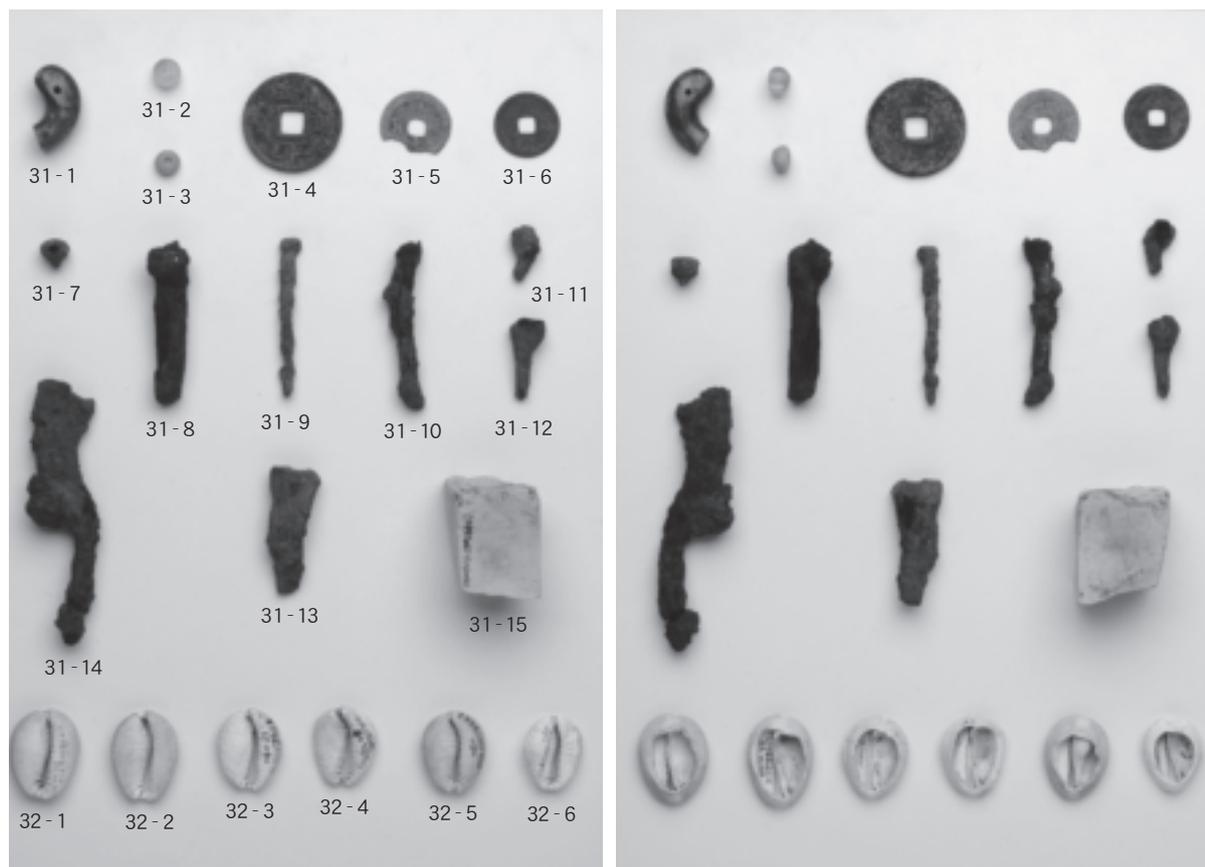
2. 出土遺物(6) 白磁・青白磁



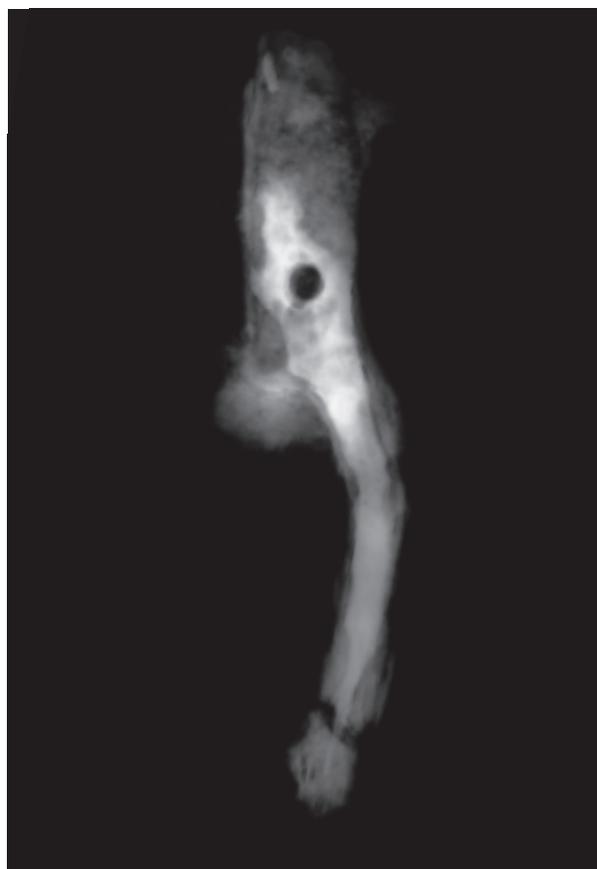
1. 出土遺物(7) 青磁



2. 出土遺物(8・9) 褐釉陶器・瑠璃釉・三彩・褐釉陶器(タイ)・染付(ベトナム)



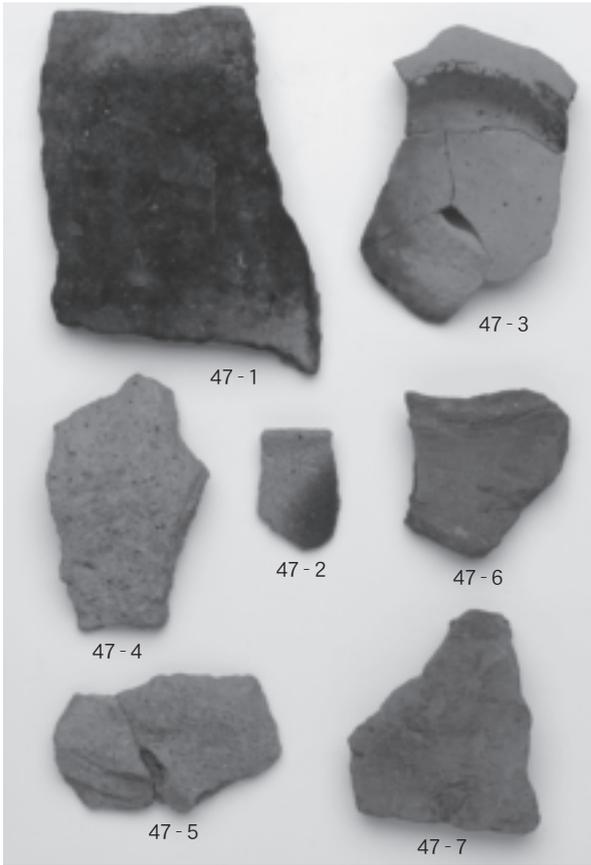
1. 出土遺物(10・11) 玉、銭貨、金属製品、石器、貝製品



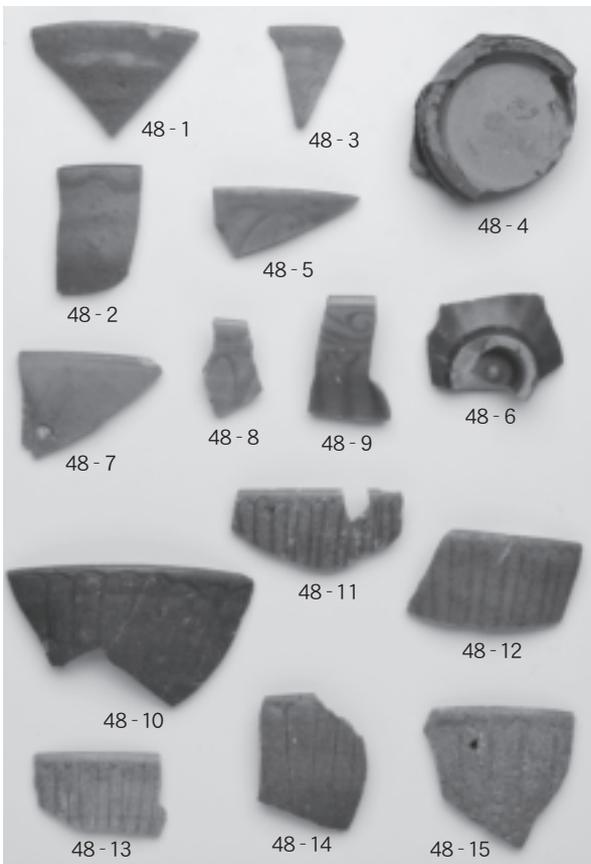
2. 鉄製品レントゲン写真 (31-14)



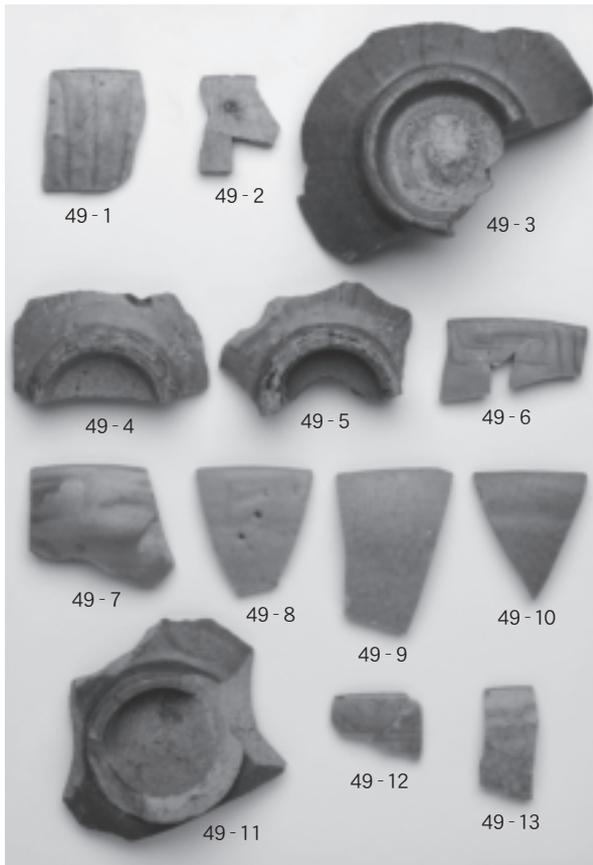
3. 参考図(志慶真門郭出土資料)



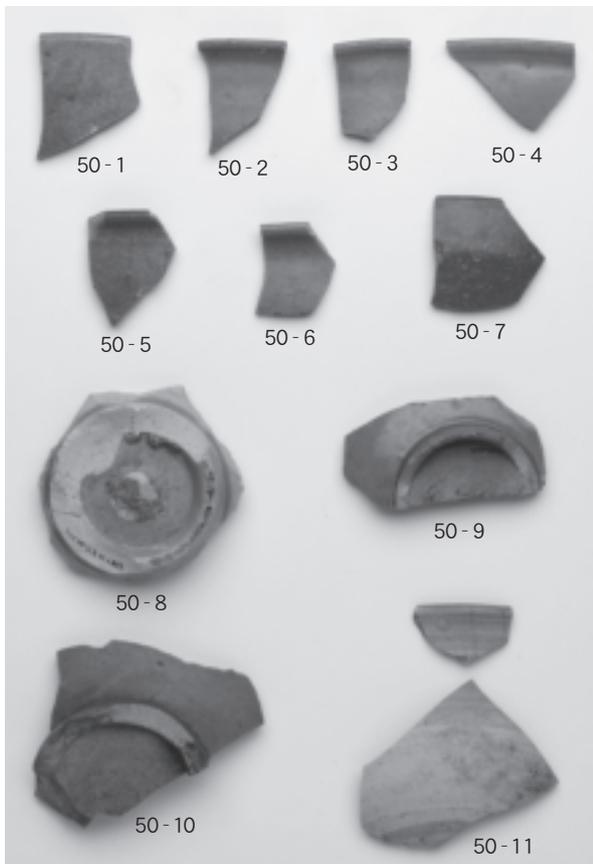
1. 出土遺物(1) 土器、カムイヤキ



2. 出土遺物(2) 青磁



1. 出土遺物(3) 青磁



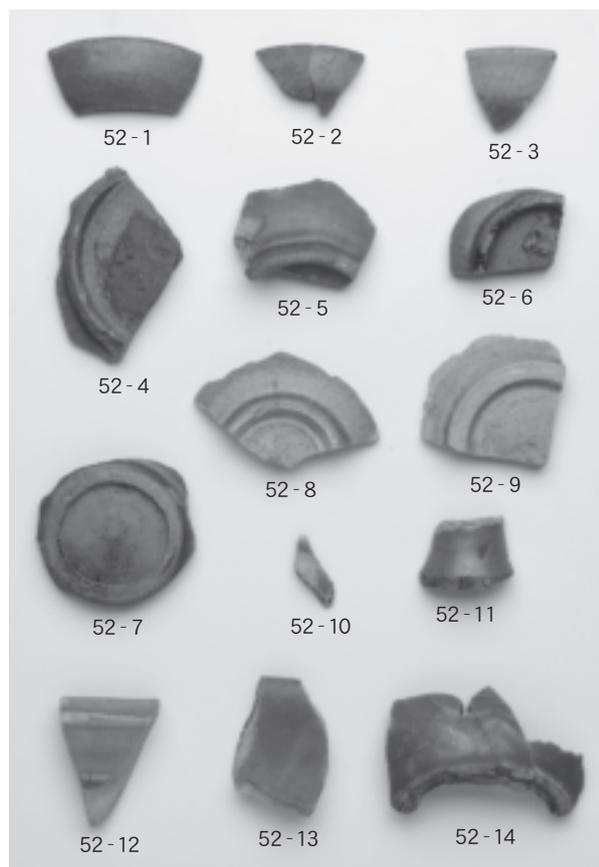
2. 出土遺物(4) 青磁



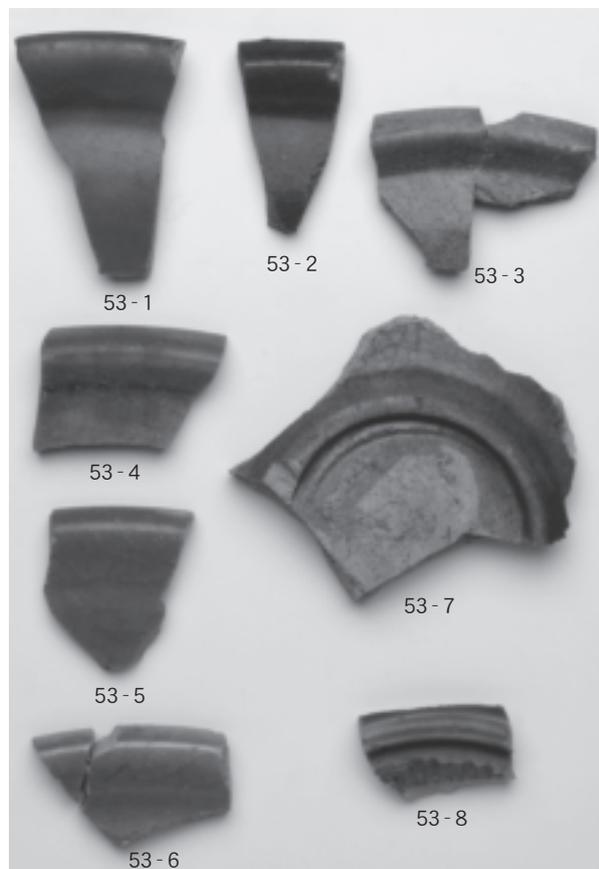
1. 出土遺物(5) 青磁



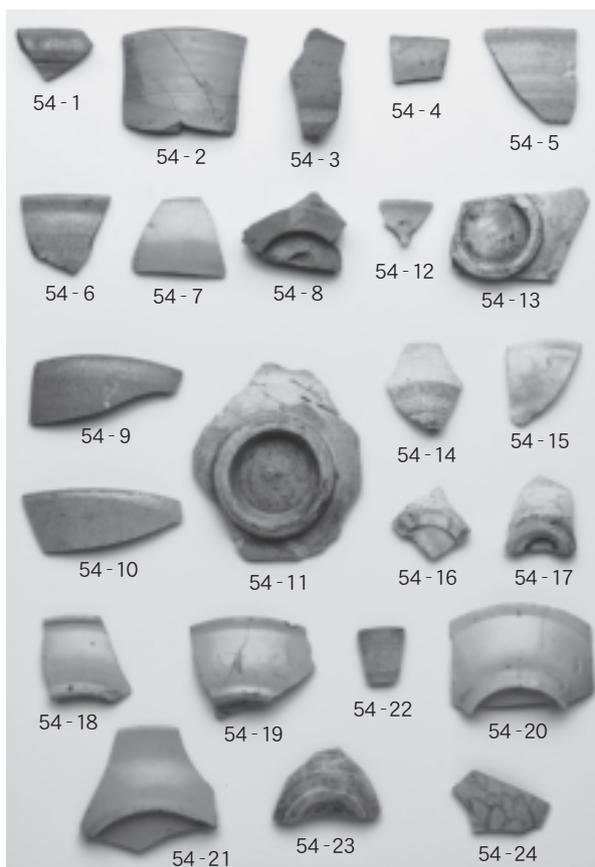
2. 同上



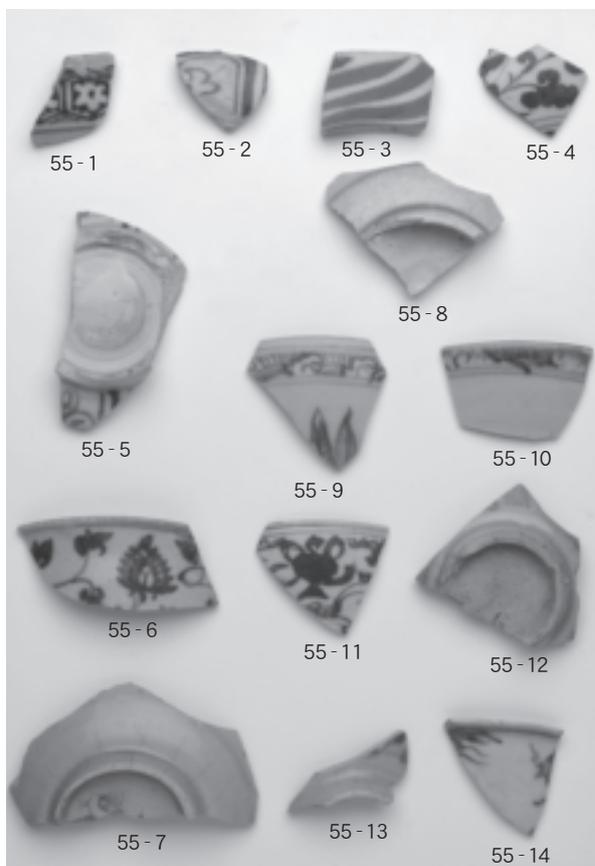
1. 出土遺物(6)



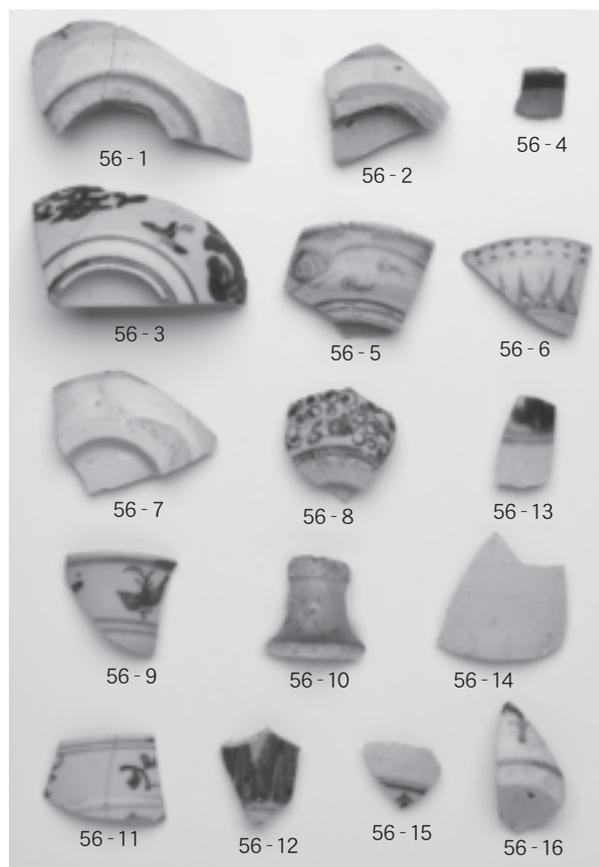
2. 出土遺物(7)



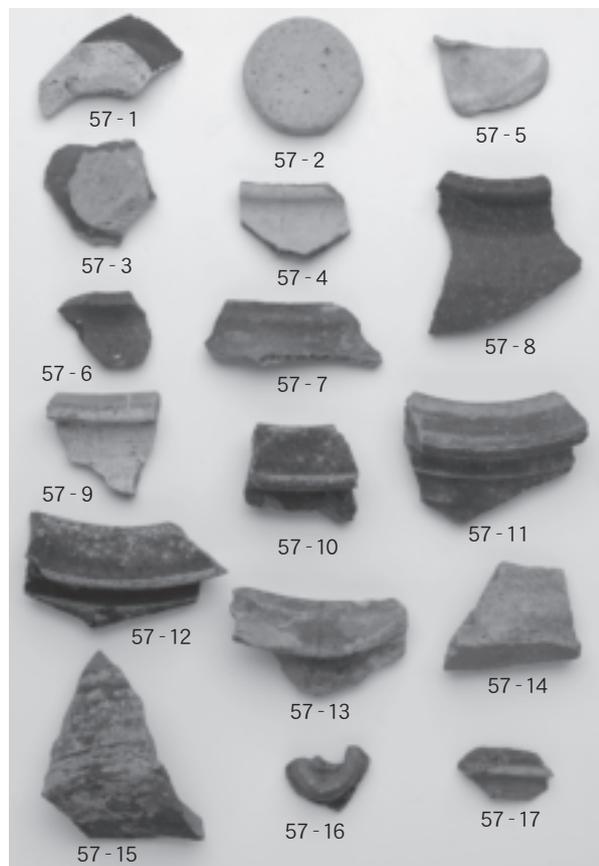
1. 出土遺物(8) 白磁



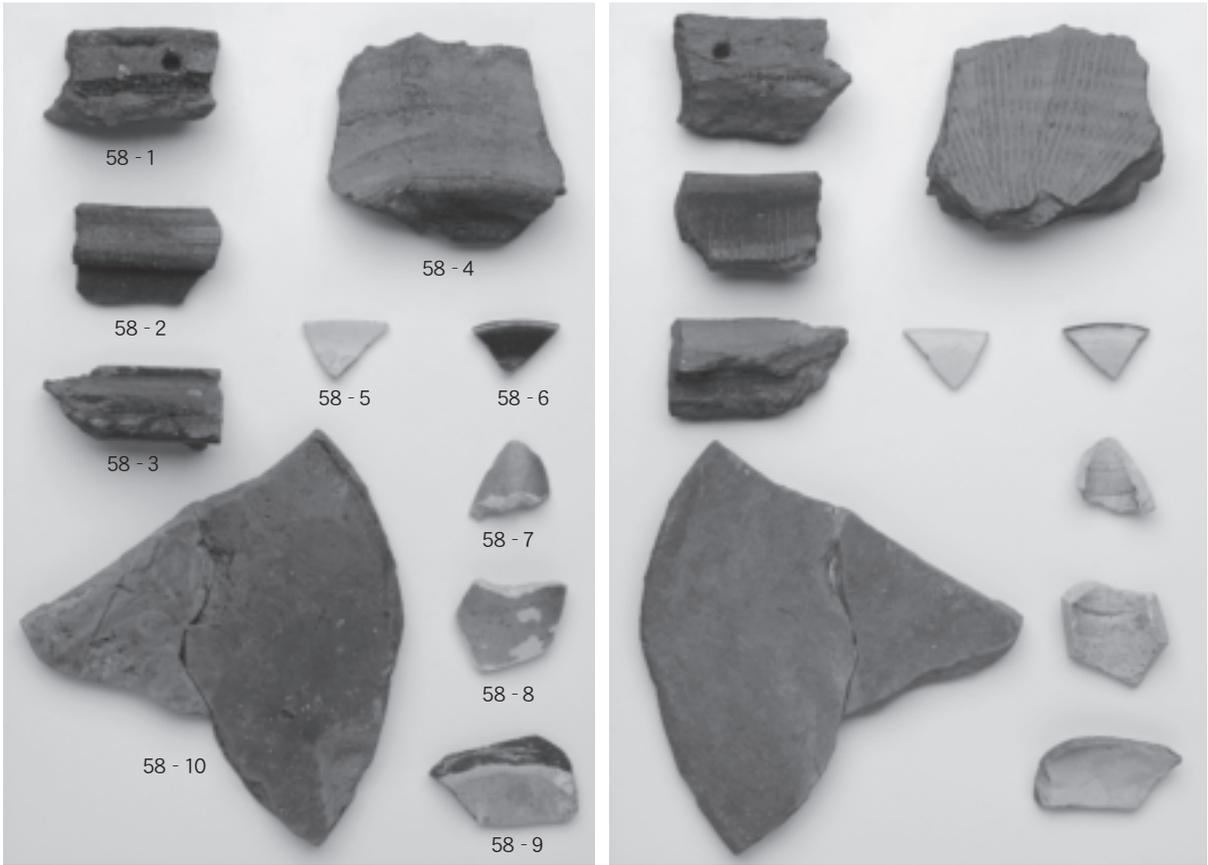
2. 出土遺物(9) 青花



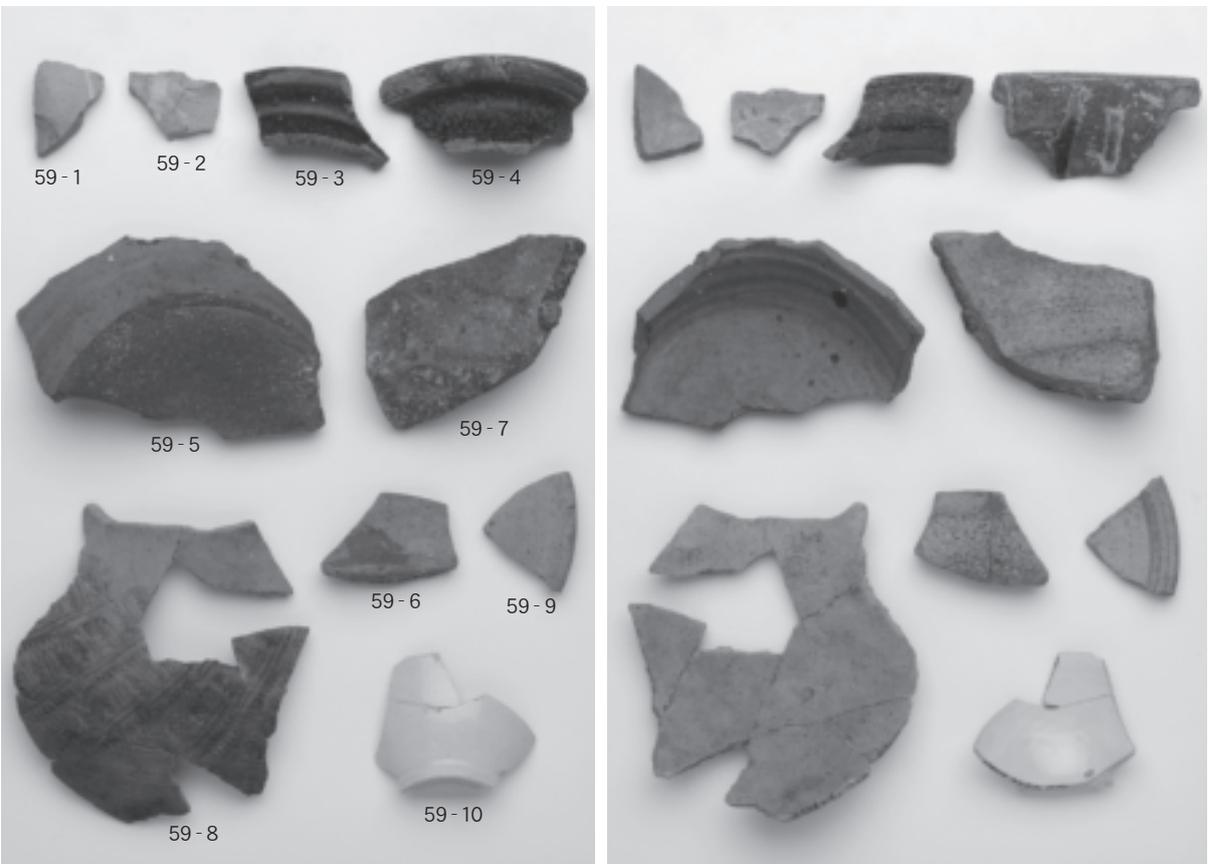
1. 出土遺物(10) 青花



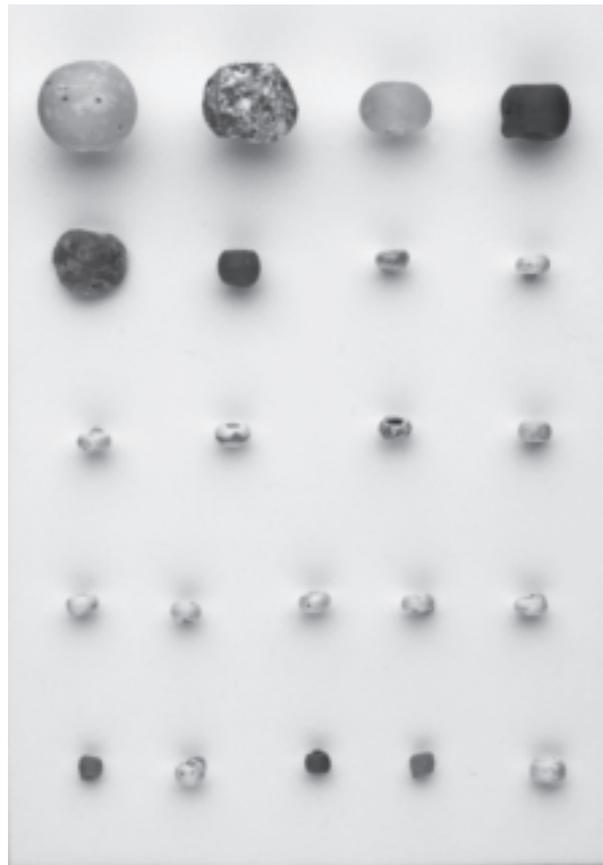
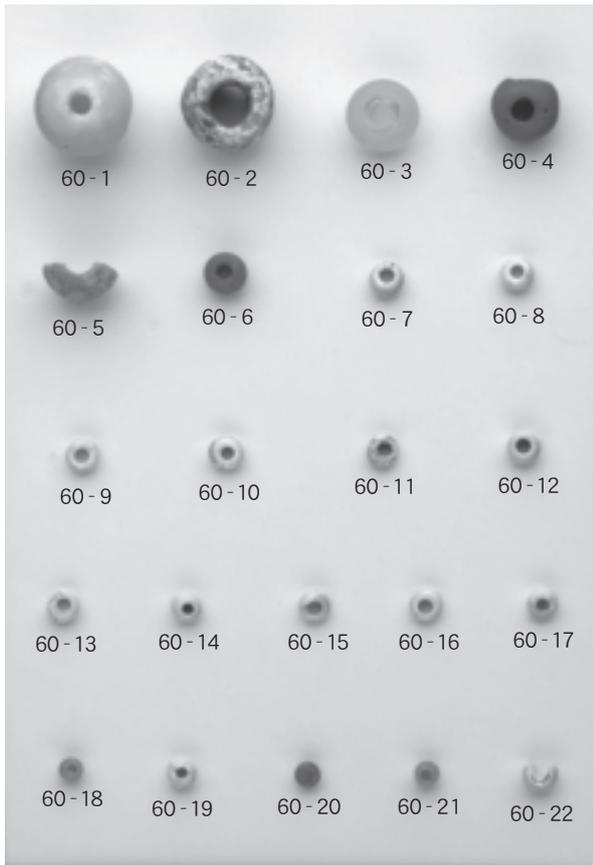
2. 出土遺物(11) 褐釉陶器



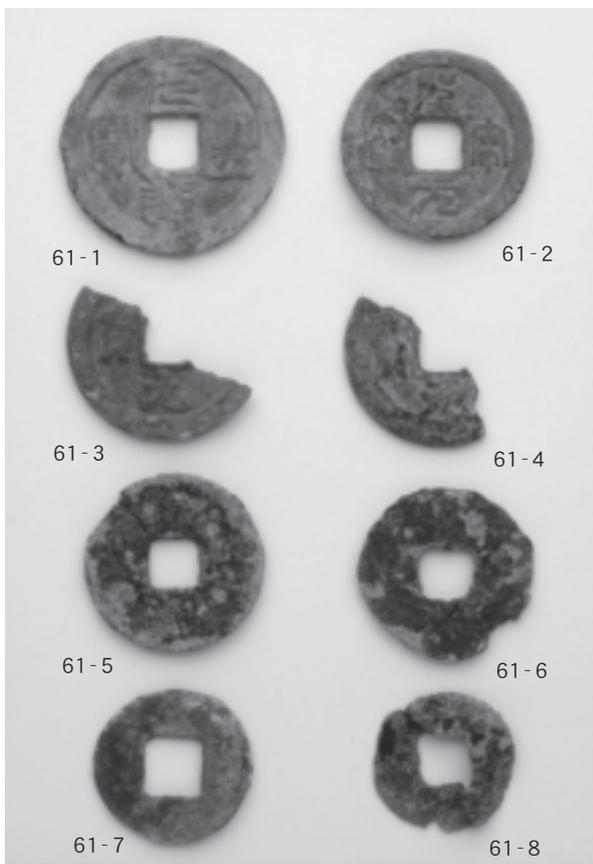
1. 出土遺物(12) 褐釉陶器、五彩、瑠璃釉、翡翠釉、緑釉



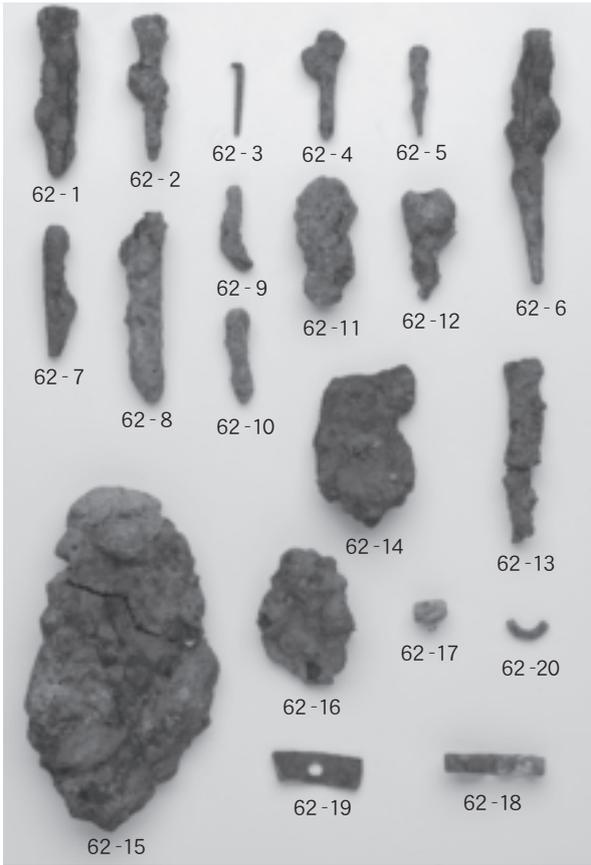
2. 出土遺物(13) 象嵌青磁(高麗)、褐釉陶器(タイ)、土器(タイ)、白磁(タイ)



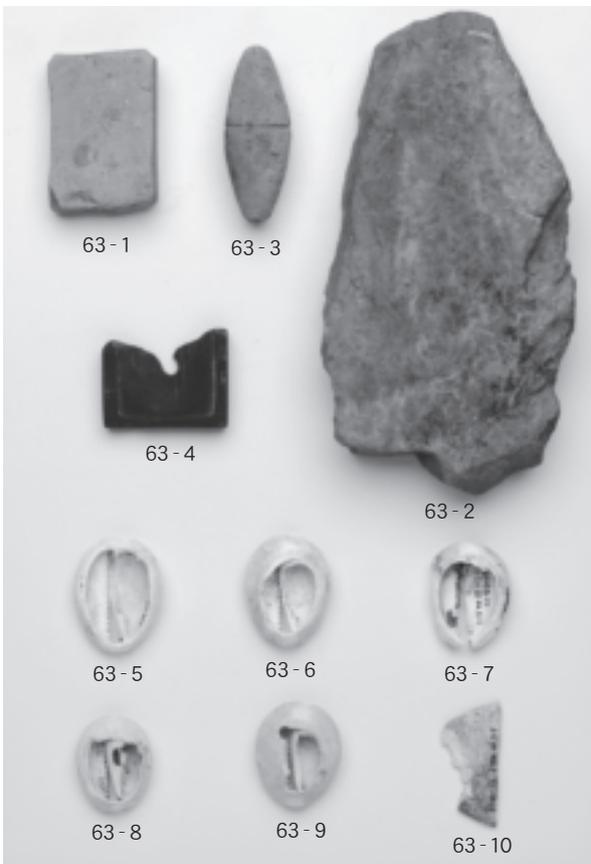
1. 出土遺物(14) 玉



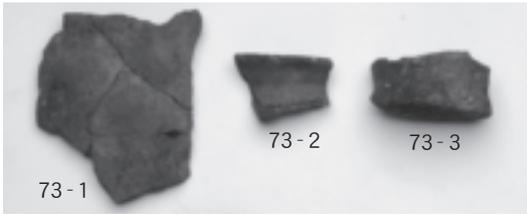
2. 出土遺物(15) 錢貨



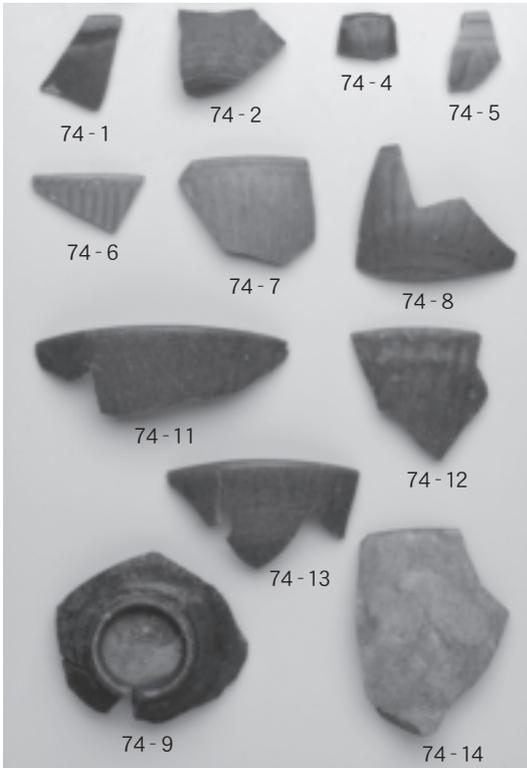
1. 出土遺物(16) 金属製品



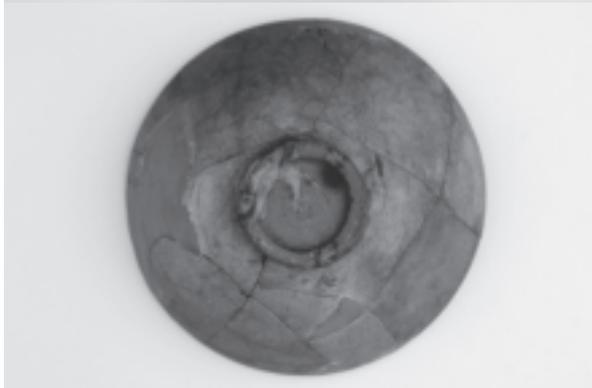
2. 出土遺物(17) 石器、貝製品



1. 出土遺物(1) 土器

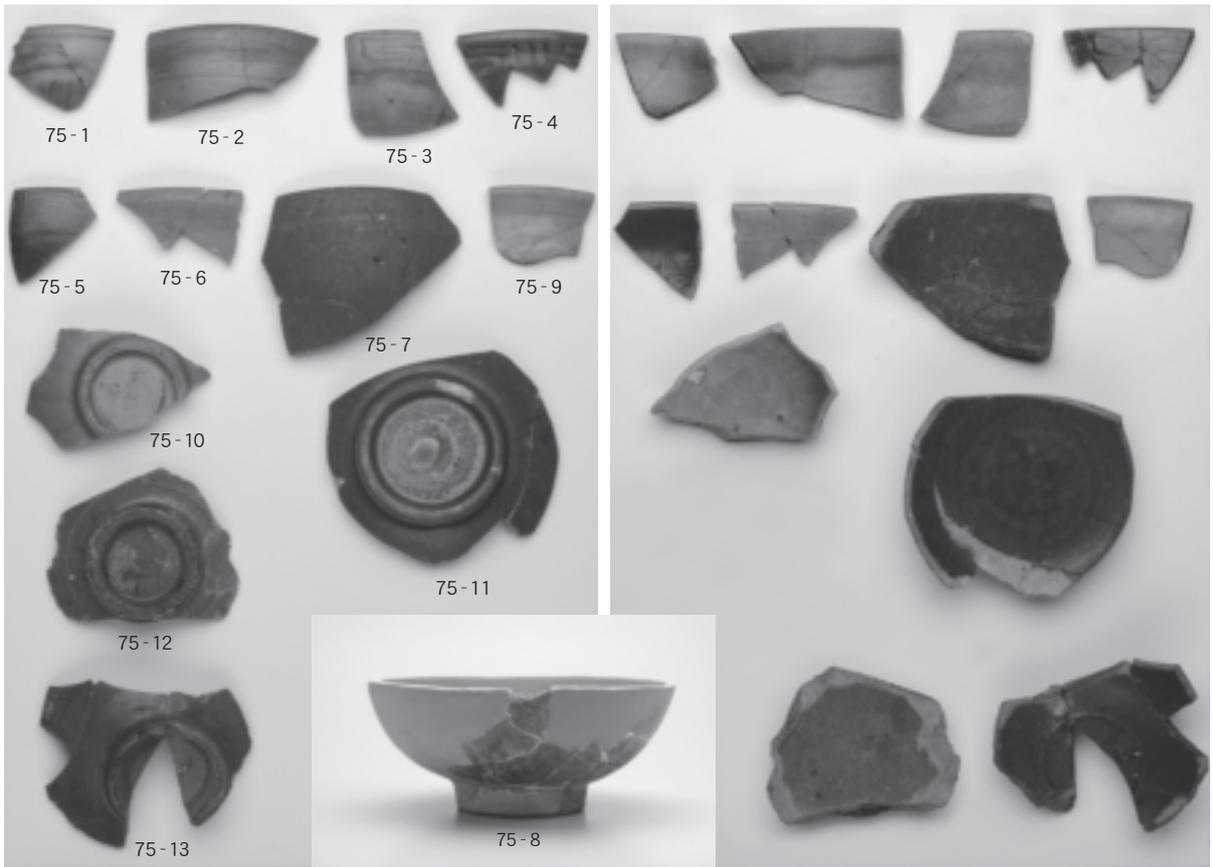


2. 出土遺物(2) 青磁

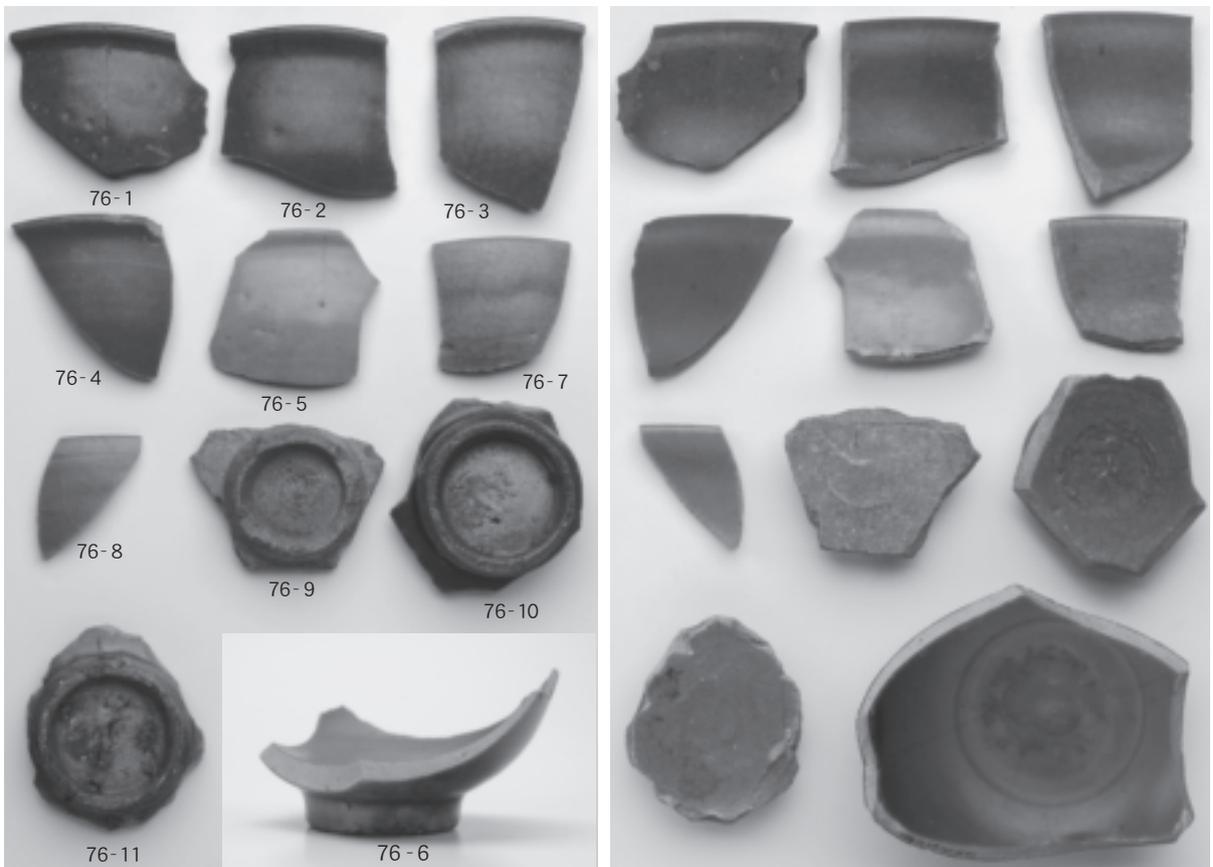


3. 出土遺物(2) 青磁

4. 出土遺物(2) 青磁



1. 出土遺物(3) 青磁



2. 出土遺物(4) 青磁



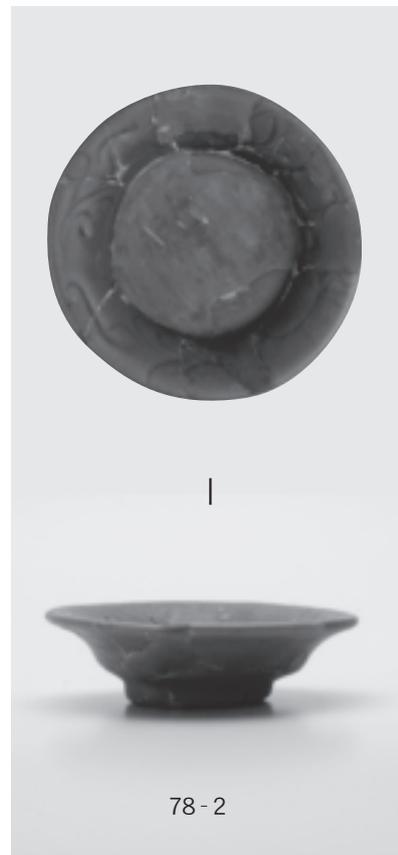
1. 出土遺物(5)



77-10



78-1



78-2

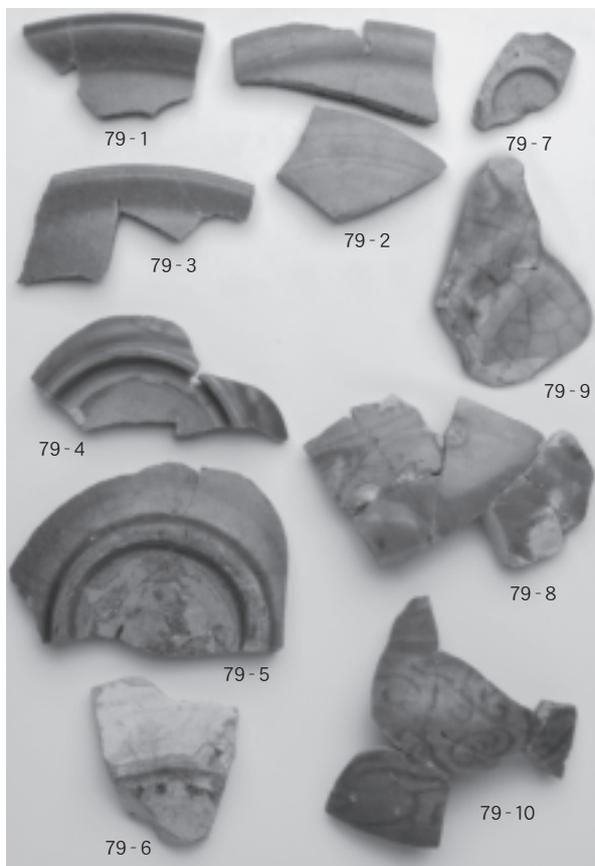
2. 出土遺物(5)

3. 出土遺物(6)

4. 出土遺物(6)



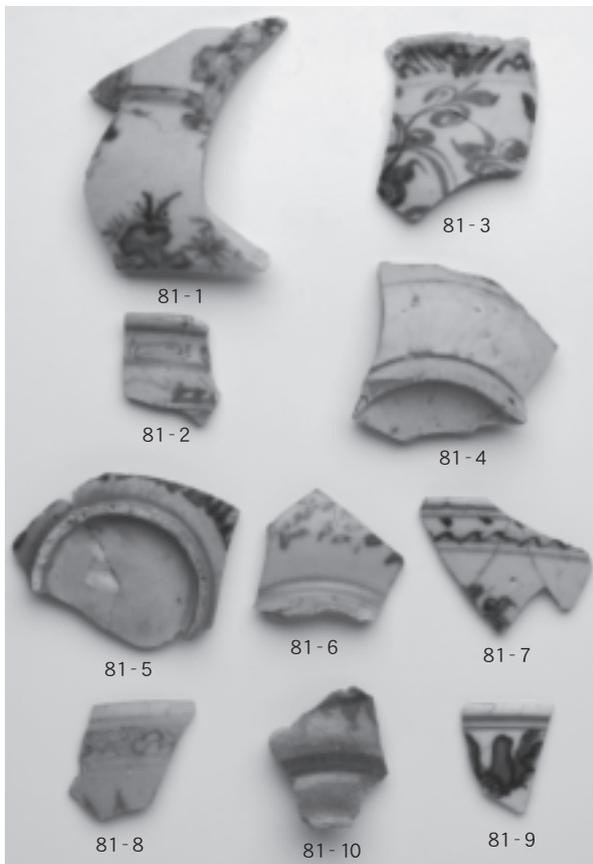
1. 出土遺物(6) 青磁



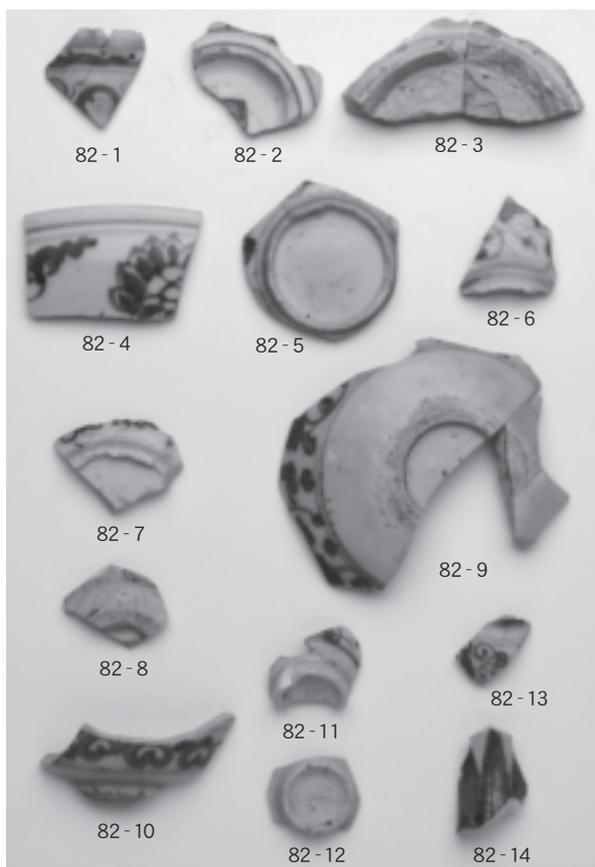
2. 出土遺物(7) 青磁



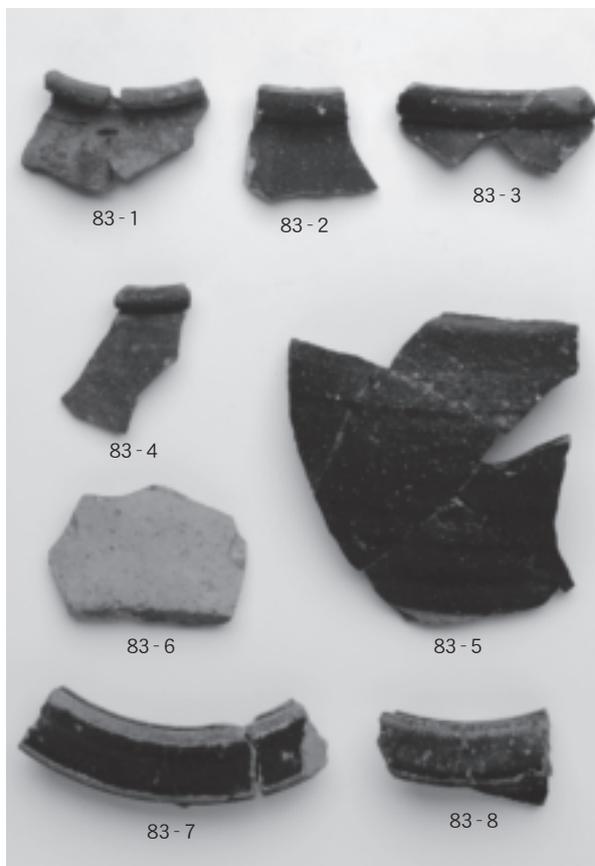
1. 出土遺物(8) 白磁、青白磁



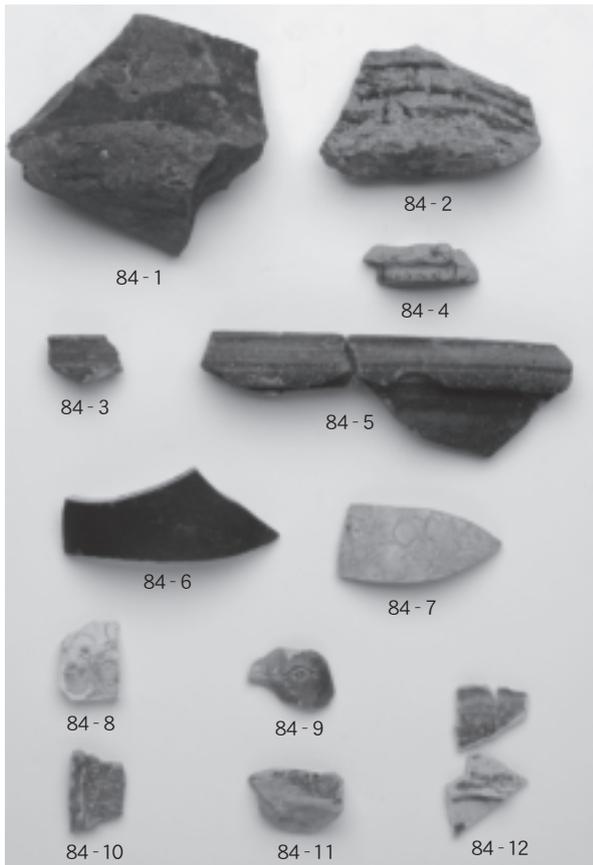
2. 出土遺物(9) 青花



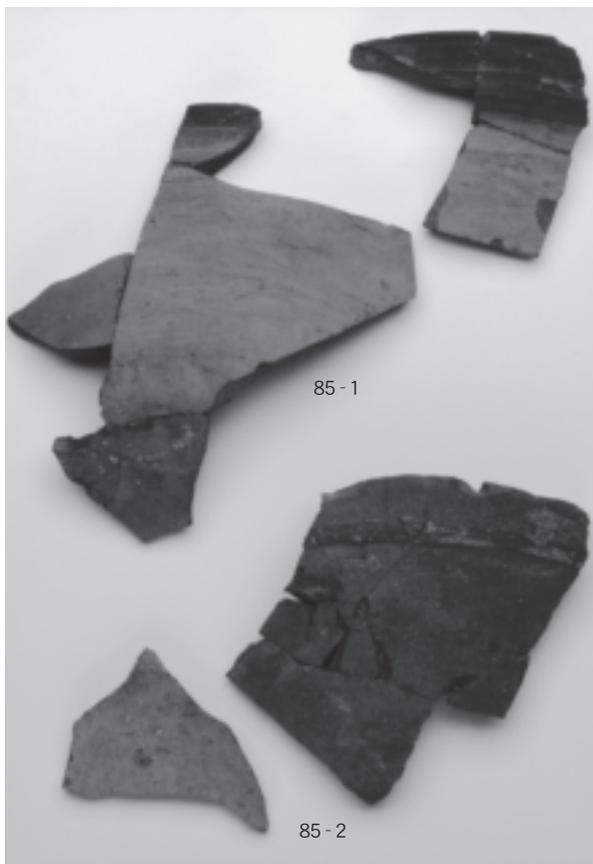
1. 出土遺物(10) 青花



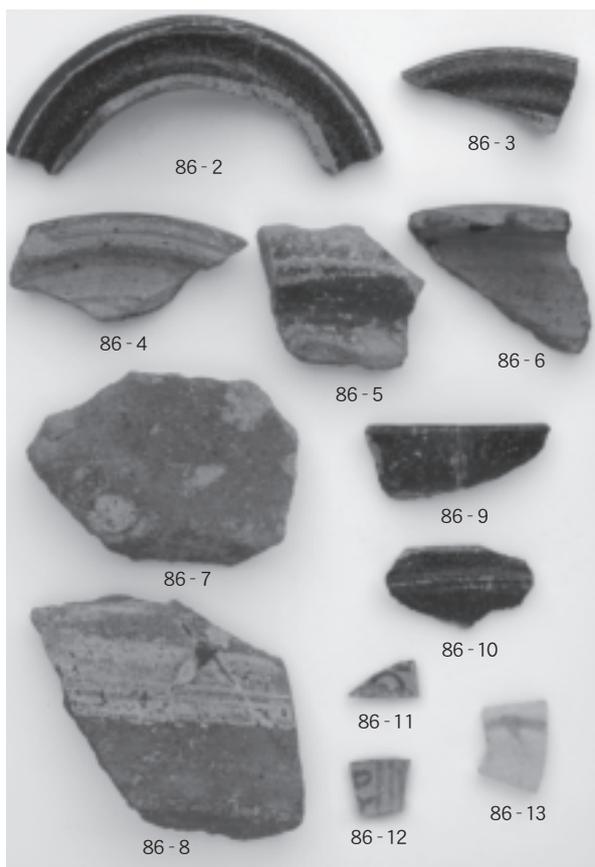
2. 出土遺物(11) 褐釉陶器



1. 出土遺物(12) 褐釉、黒釉、瑠璃釉



2. 出土遺物(13) 備前焼



1. 出土遺物(14)



2. 出土遺物(14)



拡大

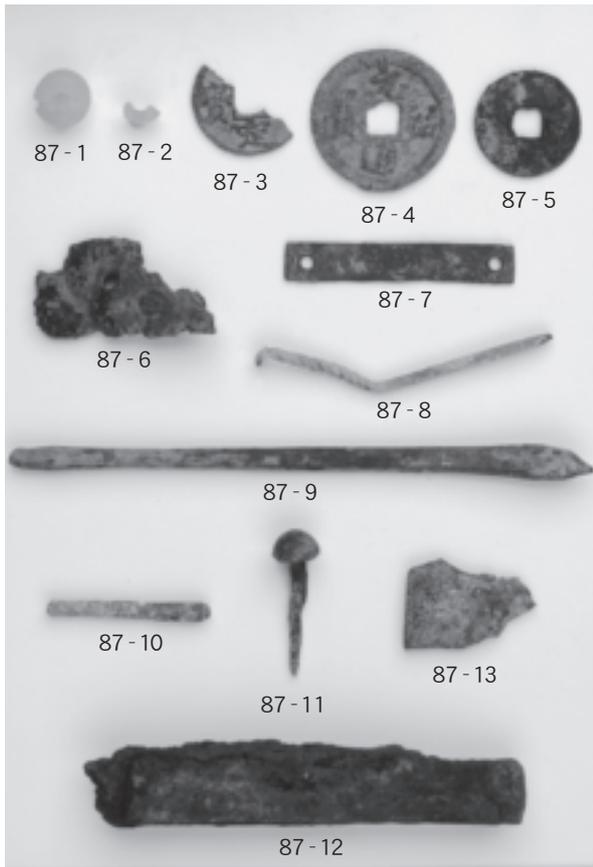


参考

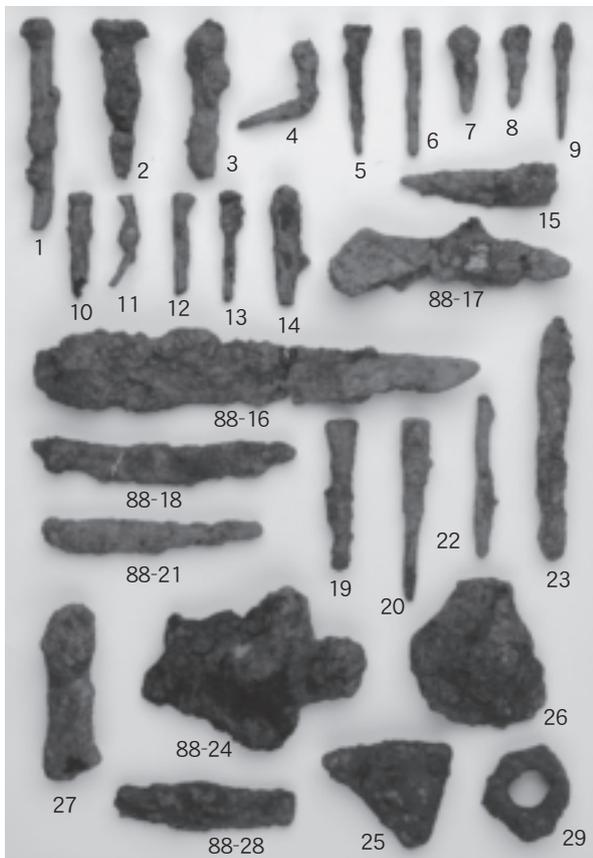
左の紋章は管見の範囲で最も似たものを転載した。
参考

◆具志頭御殿紋章
元祖は小祿王子朝奇
向姓旧首里士族大宗
那覇市首里儀保在。土
門の分家姓には、具志頭、
富里、真壁、新城などの
姓があり同門子孫男子の、
名乗頭は朝とされる。

3. 出土遺物(15)



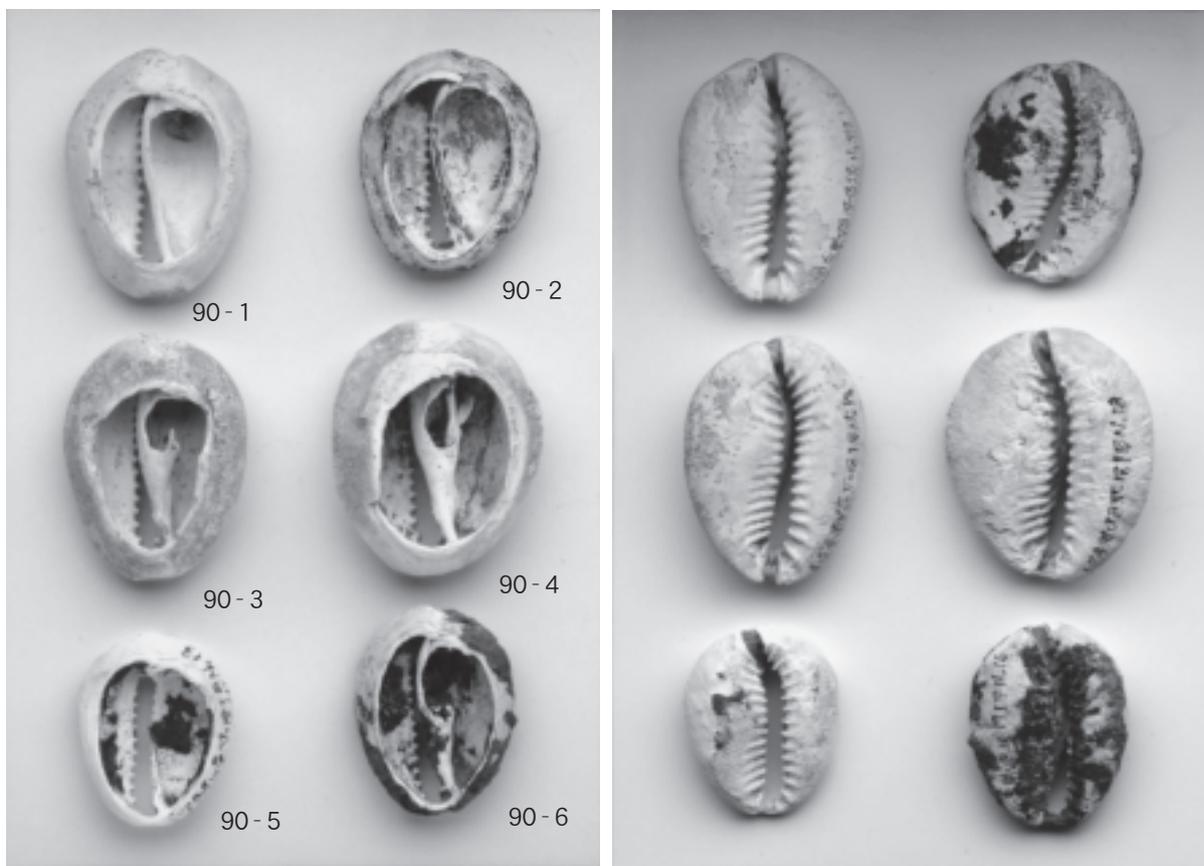
1. 出土遺物(15) 玉、錢貨、金属製品



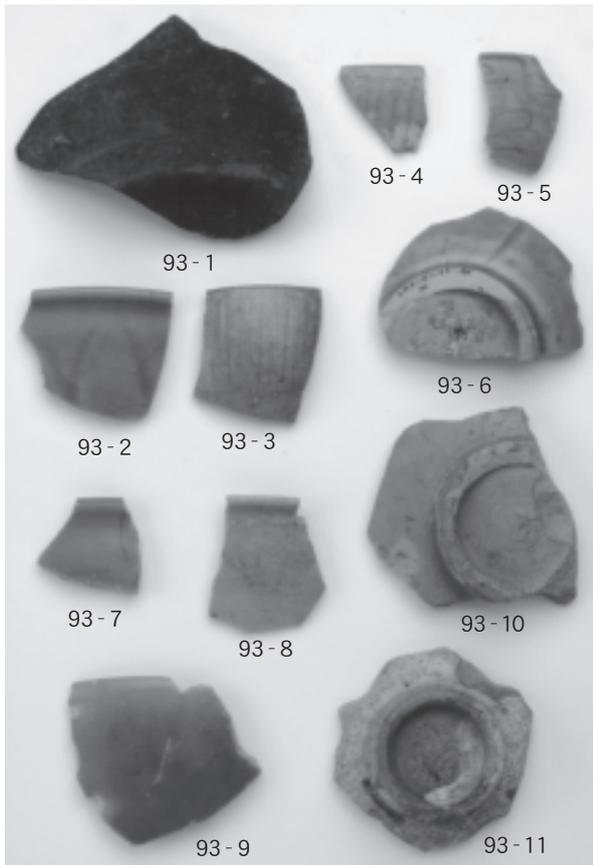
2. 出土遺物(16) 金属製品



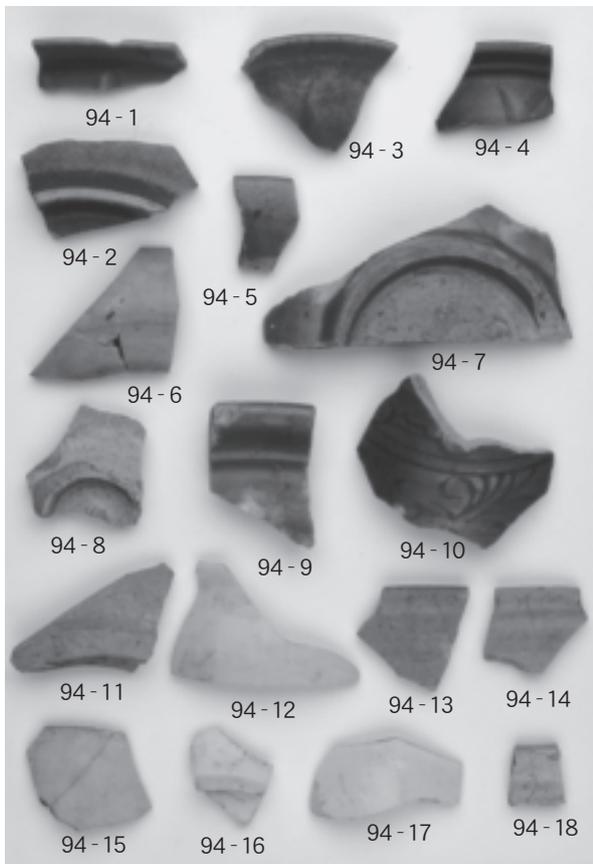
1. 出土遺物(17) 石器



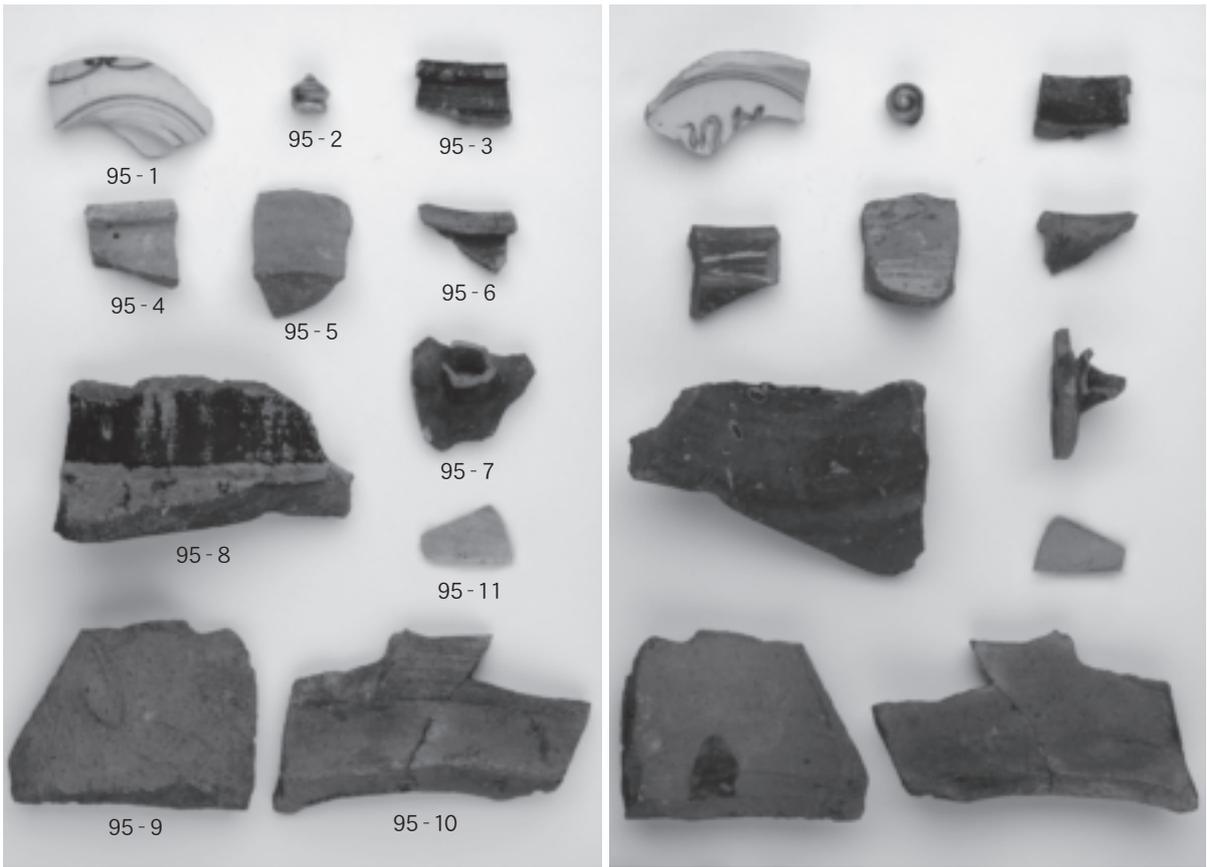
2. 出土遺物(18) 貝製品



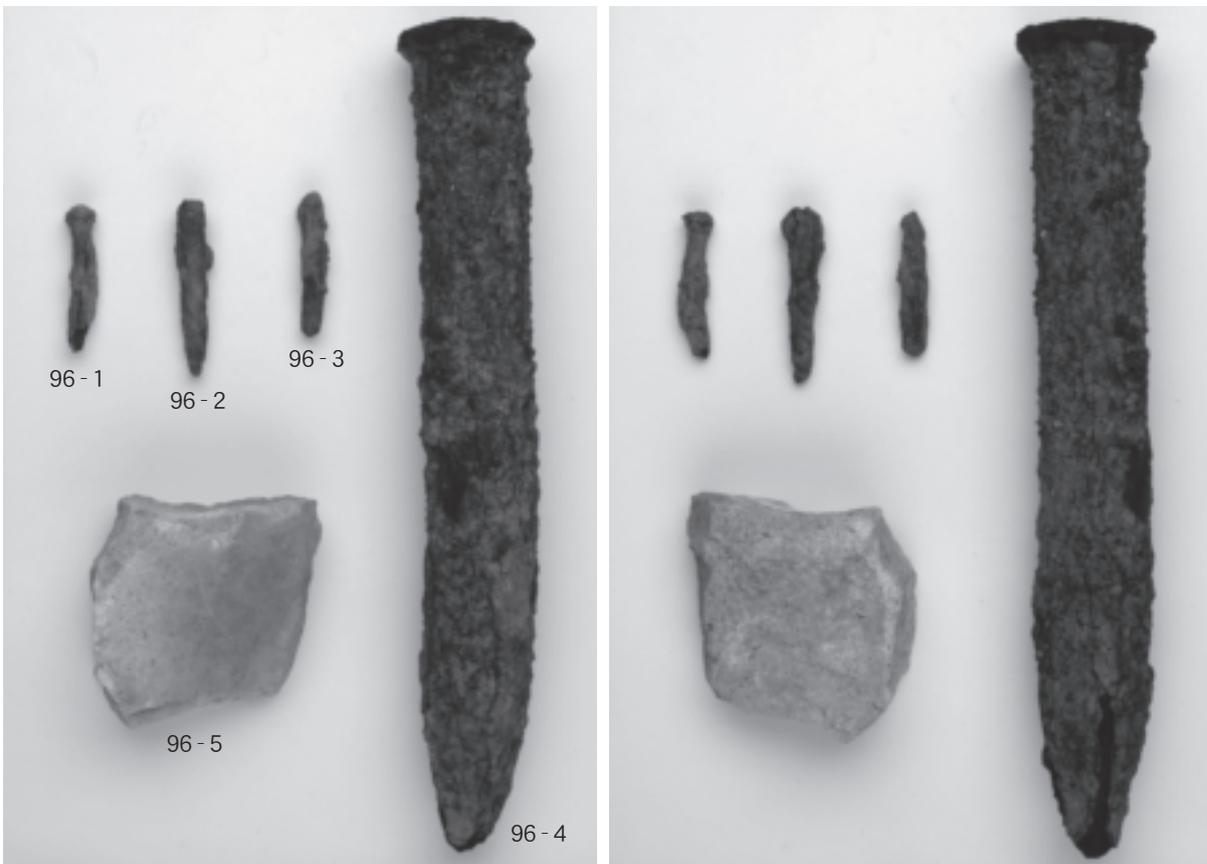
1. I区出土遺物(1) カムイヤキ、青磁



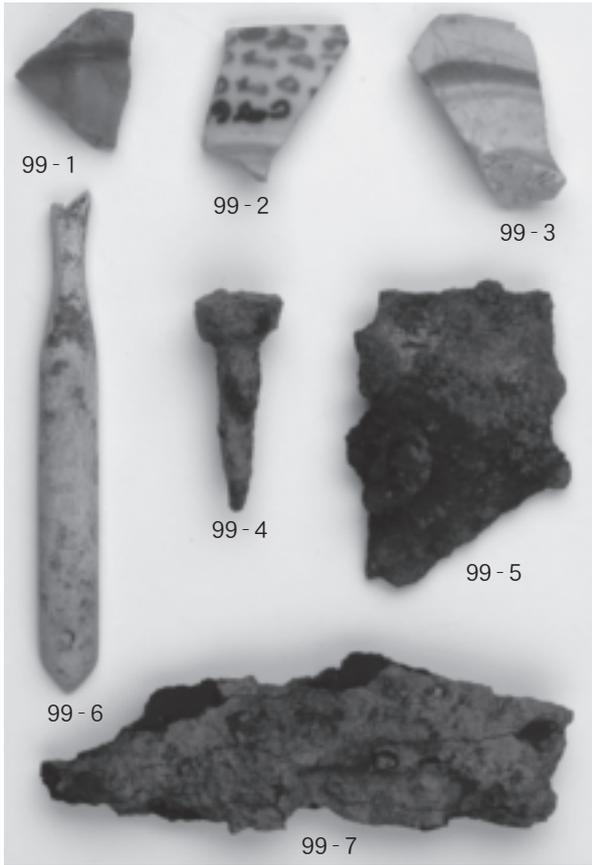
2. I区出土遺物(2) 青磁、白磁



1. I区出土遺物(3) 青花、褐釉陶器(タイ)、鉄絵(タイ)



2. I区出土遺物(4) 金属製品、石器



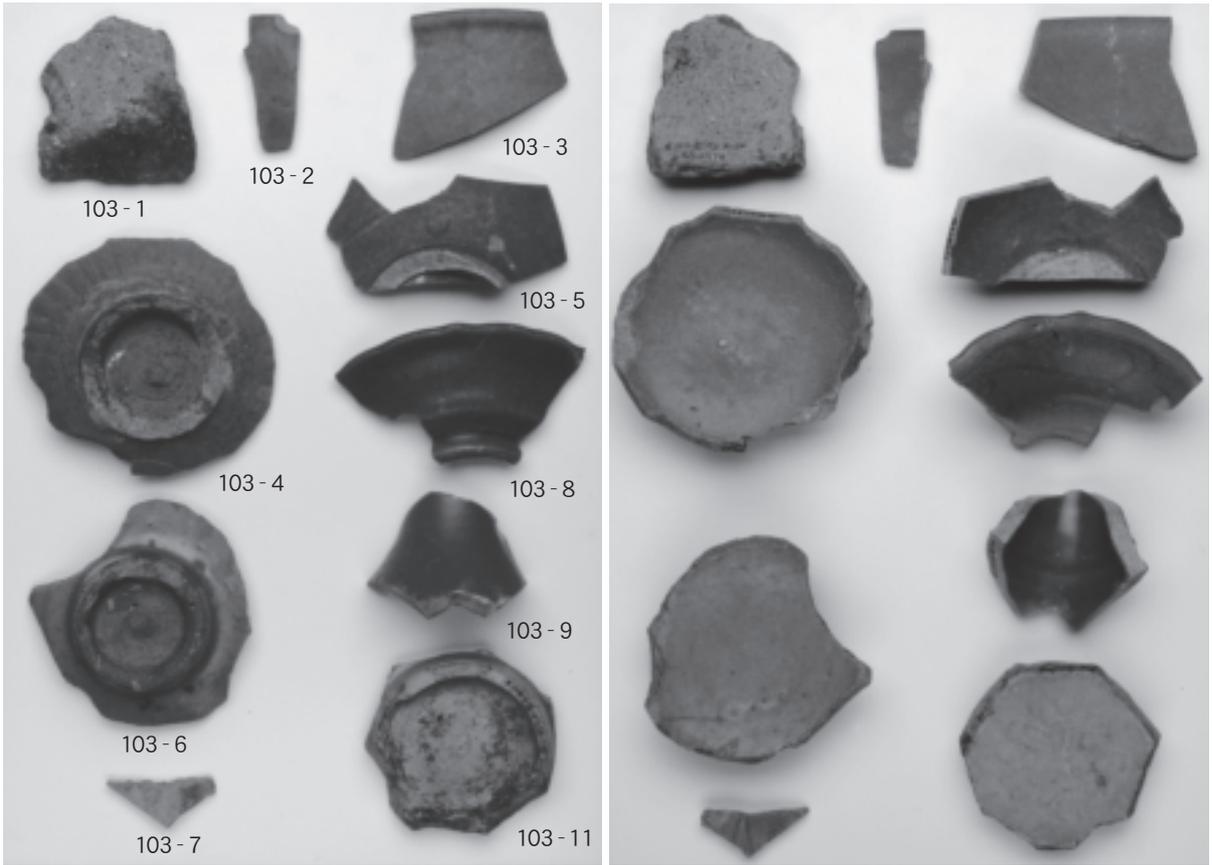
1. 道跡出土遺物 青磁、青花、染付(備前)、金属製品、骨製品



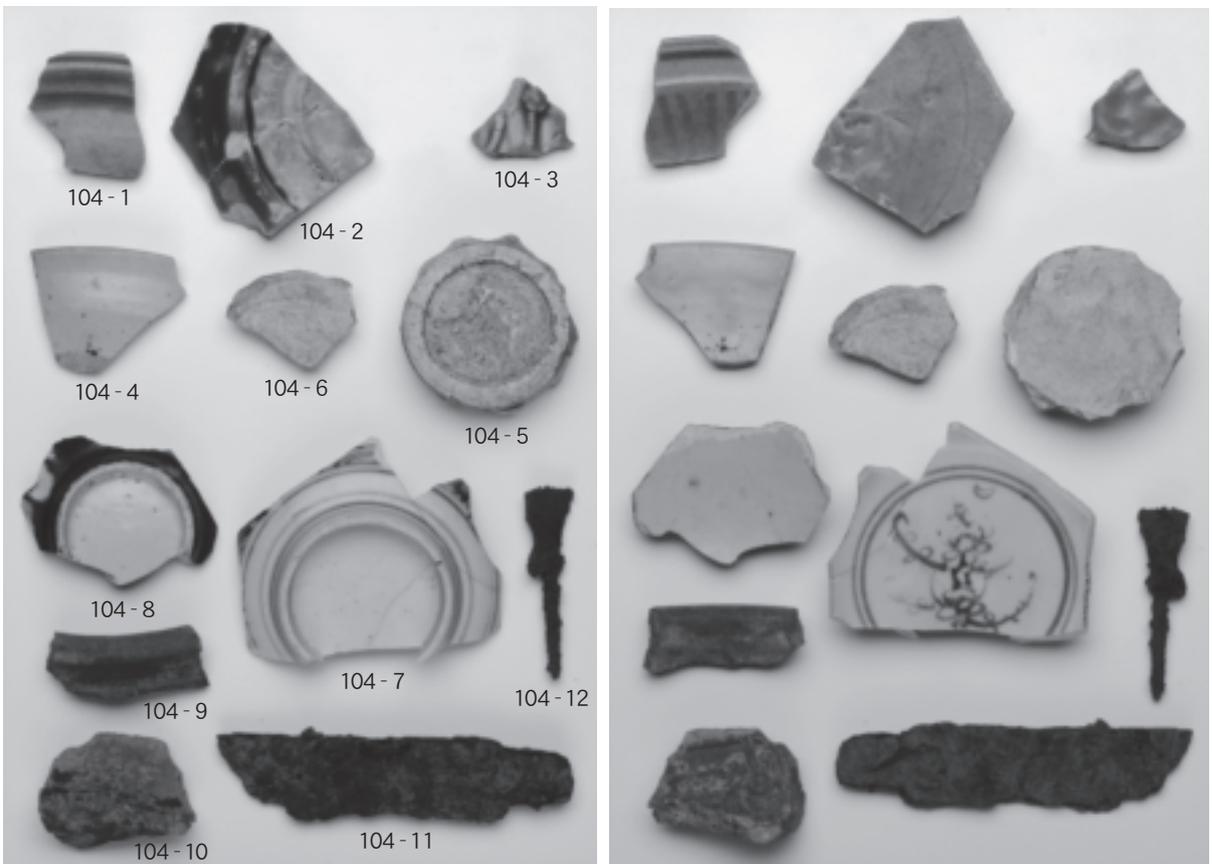
2. IV区出土遺物(2) 金属製品



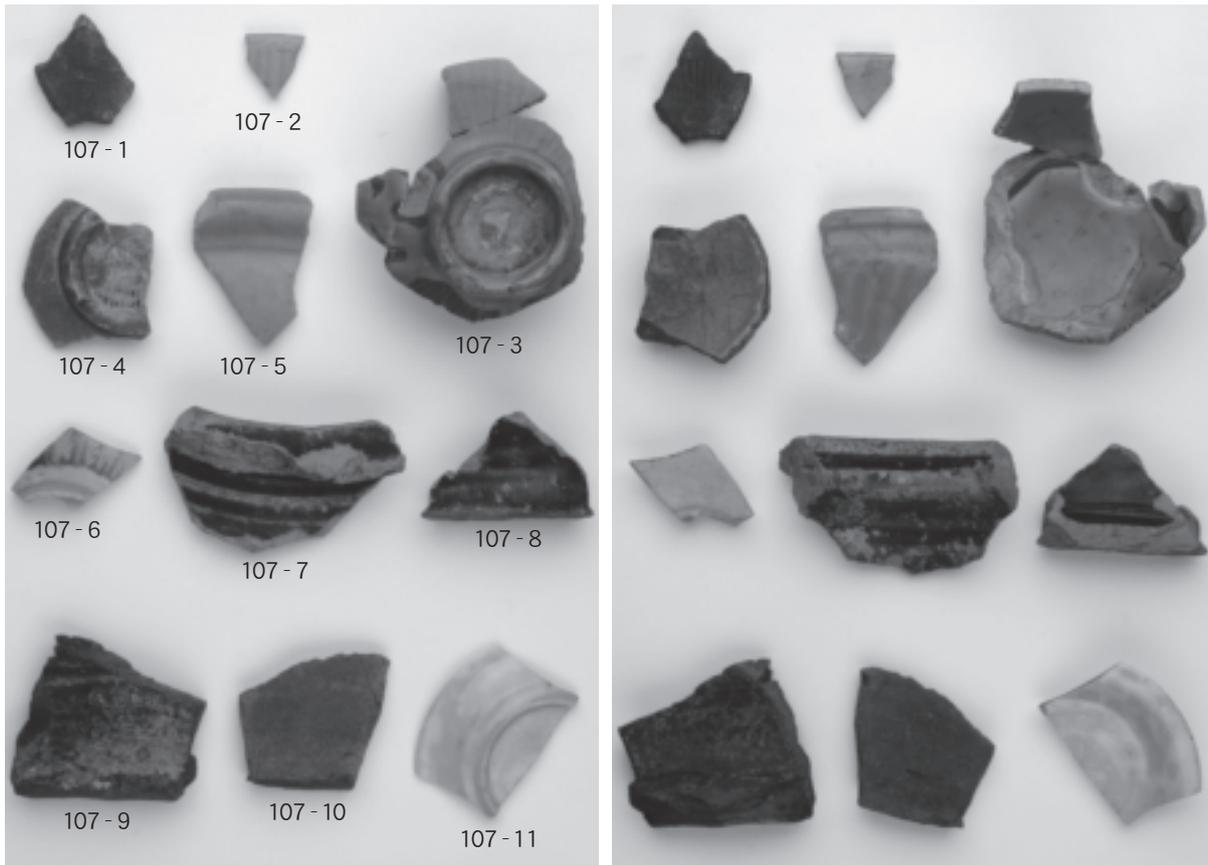
3. IV区出土遺物(1) 青磁



1. IV区出土遺物(1) 土器、青磁



2. IV区出土遺物(2) 青磁、白磁、青花、瑠璃釉、褐釉、金属製品



1. ハラクブ出土遺物 カムイヤキ、青磁、青花、褐釉陶器、褐釉陶器(タイ)、白磁



2. ハラクブ出土遺物 沖縄産陶器

報 告 書 抄 録

ふりがな	なきじんじょうせきしゅうへんいせき							
書名	今帰仁城跡周辺遺跡 II							
副書名	今帰仁城跡周辺整備事業に伴う緊急発掘調査報告							
巻次								
シリーズ名	今帰仁村文化財調査報告書							
シリーズ番号	第20集							
編著者名	宮城弘樹・玉城靖・金武正紀・与那嶺俊・新里亮人・名島弥生・黒住耐二							
発行機関	今帰仁村教育委員会							
所在地	〒905-0592 沖縄県今帰仁村字仲宗根232 TEL 0980-56-3201							
発行年日	西暦2005年7月29日(平成17年)							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "			
なきじんじょうせきしゅうへん 今帰仁城跡周辺 遺跡	なきじん 今帰仁村字今泊	473065		26°41'34"	127°55'41"	15年度 2003.4.24 ～ 2004.3.31 16年度 2004.5.13 ～ 2005.3.31	4,000m ²	今帰仁城跡周辺 整備事業に係る 緊急発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
今帰仁城跡周辺遺跡 ・今帰仁ムラ跡	集落	グスク時代 (13世紀から 16世紀)	掘立柱建物跡 堅穴建物跡 土坑 溝 ほか	中国陶器磁器 青磁 白磁 青花 褐釉陶器 五彩 瑠璃釉 翡翠釉 タイ陶磁 褐釉陶器 鉄絵 ベトナム陶磁 白磁 染付 高麗青磁 備前焼播鉢 玉類 銭貨 金属製品 石製品 貝製品				

今帰仁村文化財調査報告書第20集

今帰仁城跡周辺遺跡Ⅱ

発行 2005年7月29日
今帰仁村教育委員会
沖縄県今帰仁村字仲宗根232
TEL 0980-56-3201

印刷 文進印刷株式会社
沖縄県糸満市西崎町5丁目10-14
TEL 098-994-5777
